

第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会

アートはボーダレス

事業報告

第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会実行委員会

第8回 全国障害者芸術・文化祭 滋賀大会
アートはボーダレス

事業概要及び実施体制

- 1)主催 厚生労働省 滋賀県
- 2)共催 NHK大津放送局
- 3)運営 (社福)滋賀県社会福祉事業団
- 4)後援 障害者施策推進本部 文化庁 (財)日本障害者リハビリテーション協会
 (社福)全国社会福祉協議会 (社福)日本身体障害者団体連合会
 (社福)日本盲人会連合会 (財)全日本聾唖連盟 (社福)全日本手をつなぐ育成会
 (財)日本知的障害者福祉協会 (財)毎日新聞社会事業団 (社福)読売光と愛の事業団
 (社福)朝日新聞厚生文化事業団 (社福)産経新聞厚生文化事業団 日本経済新聞社
 (社福)中日新聞社会事業団 (社福)NHK 厚生文化事業団 (社)共同通信社
 (株)時事通信社 (株)毎日新聞社 (株)読売新聞社 (株)朝日新聞社 (株)産経新聞社
 (株)中日新聞社 (株)京都新聞社 びわこ放送(株) (株)エフエム滋賀
 (財)京都新聞社会福祉事業団

5)開催概要

- 平成 20 年 5 月 24 日
 オープニングコンサート「時空を超え、光の世界へ」(栗東市・栗東芸術文化会館さくら大ホール)
- 6 月 2 日～8 月 25 日
 全国作品公募 → 3月15日 記念図録集「アートはボーダレス」&「アウトサイダーライブ」発刊
- 11 月 11 日～11 月 24 日
 公募展「独走羅列ーどくそうーられつー」開催(大津市・滋賀県立近代美術館ギャラリー)
- 11 月 18 日
 シンポジウム「障害者による表現活動の未来～糸賀の福祉実践を原点として～」
 (大津市・ピアザ淡海ピアザホール)
- 12 月 13 日～12 月 21 日
 はじまりのアート展「ゆったりしていて やさしくて あったかい」(高島市・ギャラリー藤乃井)
- 12 月 16 日～12 月 20 日
 はじまりのアート展「いい時間… ポップ・ポップ」(大津市・大津市立生涯学習センター)
- 平成 21 年 2 月 21 日～3 月 6 日
 バリアフリー映画祭(大津会場／ユナイテッド・シネマ大津)
- 2 月 28 日～3 月 7 日
 はじまりのアート展「あ…、鼓動が聞こえる」(犬上郡豊郷町・ステップあっぷ21)
- 3 月 13 日～15 日
 バリアフリー映画祭(彦根会場／ピバシティホール)
- 3 月 15 日
 ファイナルイベント「アートはボーダレス THE ファイナル」開催(彦根市・ピバシティホール)
- 表現活動ワークショップ
 平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月 (打楽器演奏、うた、身体表現)
 県内7ヶ所(大津市、高島市、長浜市、豊郷町、湖南市、甲賀市、守山市)
- アート・サポーター派遣事業
 平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月
 県内4ヶ所(高島市、大津市、豊郷町、湖南市)

◎協賛事業

秋の特別企画展「飛行する記憶～記憶は想像を呼び起こす～」

平成20年10月4日～12月7日(近江八幡市・ボーダレス・アートミュージアムNO-MA)

糸賀一雄記念賞第七回音楽祭

平成20年11月16日(栗東市・栗東芸術文化会館さくら 大・中・小ホール)

春の特別企画展「アール・ブリュット作品との対話～心の病と表現活動」

平成21年2月3日～3月28日(近江八幡市・ボーダレス・アートミュージアムNO-MA)

6)大会役員・実行委員会

大会会長	嘉田由紀子(滋賀県知事)
大会副会長	目片 信(滋賀県市長会会長・大津市長) 北村又郎(滋賀県町村会会長・高月町長)
委員長	久保貞雄(滋賀音楽振興会 顧問)
副委員長	漣 藤寿(滋賀県健康福祉部長) 沢井進一(滋賀県県民文化生活部長) 久保厚子(社団法人滋賀県手をつなぐ育成会 会長) 北岡賢剛(社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団 理事長)
実行委員	末松史彦(滋賀県教育委員会 教育長) 齋藤 昭(糸賀一雄記念財団企画検討委員会 副委員長) 橋本浩明(滋賀県児童成人福祉施設協議会 会長) 岡本幸助(財団法人滋賀県身体障害者福祉協会 会長) 加藤直樹(きょうされん滋賀支部 理事長) 曾根 博(滋賀県精神障害者家族会連合会 理事長) 堀 正基(社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会 副会長) 西川賢司(栗東芸術文化会館さくら事業担当部長・糸賀一雄記念賞音楽祭プロデューサー) 今井祝雄(成安造形大学造形学部 教授) 梅原洋平(NHK大津放送局 放送部長) 中井憲照(滋賀県少年少女合唱連盟 理事長) 小暮宣雄(京都橘大学現代ビジネス学部 教授) 初田 勝(滋賀県市長会 事務局長) 松井忠次(滋賀県町村会 事務局長) 宮崎君武(滋賀県商工会議所連合会 会長) 川瀬重雄(滋賀県商工会連合会 会長) はたよしこ(ボーダレス・アートミュージアムNO-MA アート・ディレクター) 岸野 洋(財団法人滋賀県文化振興事業団 理事長) 津屋結唱子(しが文化芸術学習支援センター コーディネーター)
事務局	社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団

7)大会名称「アートはボーダレス」

さて、第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会のはじまりです。障害のある人たちの芸術制作、表現発表、文化的な活動の展開やサポート……それら日本各地それぞれで創られ行われてきている作品・事象を、ひろく全国的にもっと知らせ合おう、学び合おうという芸術・文化祭を、今年度は、ここ滋賀で行うことになりました。

そこで、名づけた大会名称が、「アートはボーダレス」です。キャッチフレーズ的でもあります。このような名称になったのにはいくつかの理由があります。

「ボーダレス」とは、もともと、国境がないとか、境目が消えてしまうような、という意味の英語の形容詞です。滋賀県では、近江八幡市に設置された「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」という施設名として、この「ボーダレス」という形容詞を選びました。

その意味合いは、障害のある人たちはじめ「正規の美術教育を受けたことのない(=self-taughtの)制作者」と定義づけられる「アウトサイダーアーティスト」と、そうでない現代美術などを担うアーティストなどの作品が、まさしく「ボーダレスに」そこにはあってそれらを鑑賞・体験できる「芸術の場」づくり、というものです。(なお、このボーダレス・アートミュージアム NO-MAは、はじめは「ギャラリー」といっていましたがのちに「ミュージアム」というようになりました。でも、その場の本質はあまり変化していません。)

したがって、「アートはボーダレス」の第一の意味は、アート間のさまざまなボーダーを取り払ってみよう(境目なく、共存していこう)というものです。多文化間の違いは違いとしてそれぞれ大切にしつつ、でも、アジアと西洋との線引き、音楽と美術というジャンル間、そしてアート好きとアートには縁がなかった人たちとの境も軽々と飛び越えたい、そうすれば、袴(かみしも)を脱いで、アートはもっとまちに社会に響き合うのではないか、私たちの耳元にささやくのではないか、そういう思いがこのフレーズにはあります。

さらに、二番目の意味として、アートが社会をボーダレスにしていくのではないか、という期待がこのフレーズにはこめられています。疲れたときに傍らにいたアート、気がつけばアートがある家族生活、アートと共存できる地域のあり方こそが、ボーダレスな社会を生み出すのではないか。価値の尺度が一元化され、そのために勝ち組・負け組などという気持ちの悪い言葉が生まれている昨今、この格差社会と呼ばれるような閉塞感ある時代に、アートは何らかの抜け道、活路を見つける希望となるのではないか、というものです。

アートたちをボーダレスにしようという第一の意味、そして、アートを通してボーダレスな社会に、という第二の意味。そして、これからみなさん自身が見出していこう第三、第四の未知の意味にも心を寄せて、この「アートはボーダレス」を全国に沁みだしていこうと思います。

小暮 宣雄

(京都橘大学教授・第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会実行委員)

☆大会ロゴ *デザイン 高石巧

第8回 全国障害者芸術・文化祭 滋賀大会
アートはボーダレス

第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会実施要綱

1 目的

第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会は、「障害」の枠にとらわれず、人間本来のもつ共通普遍的な表現の力と表現活動の芸術性・文化性を滋賀から全国に情報発信し、人として互いに認め、高めあえるボーダレスな芸術・文化活動の環境を積極的に創造することを目的とする。

2 名称 第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会

3 主催 厚生労働省・滋賀県

4 共催 NHK 大津放送局

5 協力 (社福)滋賀県社会福祉事業団

6 後援

障害者施策推進本部、文化庁、(財)日本障害者リハビリテーション協会、(社福)全国社会福祉協議会、(社福)日本身体障害者団体連合会、(社福)日本盲人会連合会、(財)全日本聾唖連盟、(社福)全日本手をつなぐ育成会、(財)日本知的障害者福祉協会 (財)毎日新聞社会事業団、(社福)朝日新聞厚生文化事業団、(社福)読売光と愛の事業団、(社福)産経新聞厚生文化事業団、日本経済新聞社、(社福)中日新聞社会事業団、(社福)NHK厚生文化事業団、(社)共同通信社、(株)時事通信社、(株)毎日新聞社、(株)読売新聞社、(株)朝日新聞社、(株)産経新聞社、(株)中日新聞社、(株)京都新聞社、びわこ放送(株)、(株)エフエム滋賀、(財)京都新聞社会福祉事業団

7 期間 平成20年4月～平成21年3月

8 開催地 県内各地

9 開催方針

- (1)これまで滋賀で培われてきたボーダレスな芸術・文化の取り組みを全国へ情報発信
- (2)滋賀県内全域で展開
- (3)一年間を通して開催
- (4)福祉関係、文化芸術分野などから、多様な参加を募る

10 開催方法

大会会長を滋賀県知事、大会副会長を滋賀県市長会会長および滋賀県町村会会長とし、別に定める規約に基づき福祉団体、文化芸術団体等で構成する実行委員会を組織し開催する。

11 大会内容

(1)行事の開催

- ①オープングレセプション
- ②秋の特別企画展
- ③糸賀一雄記念賞音楽祭(関連事業)
- ④障害のある人たちの表現活動に関するフォーラム

- ⑤はじまりのアート展
- ⑥バリアフリー映画祭
- (2) 図録集の作成
 - ⑦全国アウトサイダーアート図録集の制作
- (3) ホームページの開設
 - ⑧専用ホームページの開設

12 この要綱に定めるもののほか、大会の実施に必要な事項は別に定める。

第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会実行委員会規約

(名称)

第1条 この会は、第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会実行委員会(以下「委員会」という。)という。

(目的)

第2条 委員会は、滋賀県において開催される第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会(以下「大会」という。)の円滑な開催を図ることを目的とする。

(活動)

第3条 委員会は、前条の目的を達成するため、次の活動を行う。

- (1)大会に関する総合企画および運営に関すること。
- (2)関係機関および関係団体への支援調整に関すること。
- (3)その他大会の目的を達成するために必要な事業に関すること。

(組織)

第4条 委員会は、別表に掲げる者により構成する。

(役員)

第5条 委員会に次の役員を置く。

- (1)委員長:1名
- (2)副委員長:数名

2 委員長および副委員長は委員による互選により選出する。

(役員の職務)

第6条 委員長は、委員会を代表し会務を処理する。

2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代理する。

(役員の任期)

第7条 委員会の役員の任期は、委員会が解散するまでとする。

(会議)

第8条 委員会の会議は委員長が招集する。

(会議の議長)

第9条 会議の議長は、委員長が務める。

1 委員長が欠席する場合は、副委員長が務める。

(委員会の決議事項)

第10条 委員会は、次に掲げる事項を審議し決定する。

- (1)規約の改廃に関する事項
- (2)事業計画および収支予算に関する事項
- (3)事業報告および収支決算の承認に関する事項
- (4)その他委員会の業務に関する事項で委員長が必要と認める事項

(定足数)

第11条 委員会は、構成員の2分の1以上の出席により開会するものとする。ただし、やむを得ない理由により会議に出席できない委員は、代理人もしくは出席する委員に議決権を委任することことができ、この場合においては出席したものとみなす。

(表決)

第12条 会議の議事は、出席者の過半数をもって可決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(専決処分)

第13条 委員長は、委員会を招集するいとまのない緊急な事項については、これを専決処分することができる。

2 前項の規定により専決処分したときは、委員長は、これを次の会議において報告し、その承認を求めなければならない。

(経費)

第14条 委員会の経費は、補助金およびその他の収入をもってあてる。

(会計)

第 15 条 委員会の会計は、翌年の3月31日をもって終了する。

2 その他委員会の会計に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

(事務局)

第 16 条 委員会の事務処理および事業実施のために、社会福祉法人滋賀県社会福祉事業 団に事務局を置く。

2 事務局長は、社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団の職員をもって充てる。

3 その他委員会の事務局に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

(その他)

第 17 条 この規約に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

(附則)

この規約は、平成20年3月21日から施行する。

オープニングコンサート
『時空を超え、光の世界へ』
開催報告

■開催日時

平成20年5月24日(土) 18:30~21:15 【開場】17:30 【開演】18:30
 * 劇場仕込み 平成20年5月19日(月)~5月23日(金)

■開催会場

栗東芸術文化会館さくら 大ホール (滋賀県栗東市纒2-1-28)

■鑑賞者数

582名
 (一般387名 シルバー・障害者87名 小中学生57名、招待者51名)

■公開リハーサル

平成20年5月23日(金)16:00~17:00

* コンサート当日に来場が難しい県内の障害のある人たちにもこのコンサートを感じてもらいたいと、出演者の林英哲氏、中谷満氏からの発案で実現した。これまで両氏と縁のある人たちをはじめ、障害者施設、特別支援学校等に呼びかけ、約100名のお客さんに参加してもらえた。

プログラムの内容は、鑑賞される方々の体力的な面に配慮し、1時間に圧縮した形で開催した。

公開リハーサルに参加された方々の中には、コンサート当日も鑑賞に来られた方もいた。



■開催内容

「アートはボーダレス」をテーマとする本大会のオープニングを飾るのに、これまでに滋賀県の障害のある人たちの表現活動に関わりのある演奏家をお迎えして開催した。世界で活躍する和太鼓奏者・林英哲氏と大津出身で元大阪フィルハーモニー交響楽団のティンパニ奏者・中谷満氏とのジョイントコンサート。東と西、洋と和などのボーダーを超えて、世界をフィールドに活躍し、あらゆる鼓動を体現してきた二人の和太鼓、打楽器奏者の鼓舞に加え、全国の障害のある人たちの造形作品や活動を映像化した作品を写し出し、その三者によるコラボレーションを構成し、『表現すること』について何かを感じてもらえるように開催した。また、このコンサートでは本大会の委嘱作品として、作曲家・和田薫氏に制作していただいた『和太鼓と打楽器アンサンブルのための鼓神II』の初演を披露いたしました。当日は多くの観客を魅了しました。

■スタッフ

- ・プロデューサー 西川賢司 (本大会実行委員)
- ・映像制作 代島治彦 ・舞台美術 藤吉成三 ・照明プラン 安藤元映
- ・衣装 阿部美千代 ・舞台監督 和田豊 ・音響 平崎秀和
- ・舞台/照明 さくらテクニカルスタッフ ・映像制作 代島治彦 ・広報デザイン 高石巧

■制作協力

(有)遙[HAL] (有)東京音楽工房 (有)スコブル工房 栗東芸術文化会館さくら 滋賀県社会福祉事業団

■出演者

林英哲 (和太鼓奏者)

平成16年2月1日に開催した「糸賀一雄記念賞第二回音楽祭」にゲスト出演。林氏の楽曲「千の海響」の滋賀バージョンを、250名を超える全出演者によりフィナーレを行う。

音楽祭前の12月と1月には英哲氏による「和太鼓ワークショップ」を栗東で行う。さらに、遡ること10年くらい前に県主催で行われた「アートフェスティバルインしが」の関連イベントで、大津市民会館にて、「小室等&林英哲ジョイントコンサート」を開催し、ステージにて県内の障害のある人たちの陶芸作品を楽器に見立てて演奏



した。

中谷満 (ティンパニ奏者)

平成12年に開催した「命輝けびわ湖第九コンサート」、平成14年開催の「2002年命輝けびわ湖第九コンサート」の実行委員として参画。

その後、「糸賀一雄記念賞音楽祭」の打楽器演奏部門において、ワークショップでのナビゲートを自身で行い、本県における打楽器演奏ワークショップの基礎を築く。

大学で若手演奏家を指導する傍ら、その門下生たちを障害のある人たちの表現活動(打楽器演奏)の現場において派遣している。



英哲風雲の会



はせみきた 服部博之 田代誠 谷口卓也

パーカッションアンサンブル「シュレーゲル」



宮本妥子 清水美紀 中路友恵 関口百合子
満永絢子 池田愛子 土方雅子 西岡恵美子
改發麻衣 松尾桜 磯野加奈

「沈黙の生命」全国の障害者の造形作品を映像化した作品(撮影・編集:代島治彦)



澤田真一作品



本岡秀則作品



辻勇二作品



澤田真一作品

■委嘱作品 『和太鼓と打楽器アンサンブルのための鼓神Ⅱ』

和田 薫 (作曲・編曲・プロデュース)

この作品は、滋賀県社会福祉事業団の委嘱により、第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会オープニングコンサートのために、世界的和太鼓奏者である林英哲氏と日本を代表するティンパニスト中谷満氏を中心にした新作として創案構成され、2008年4月に脱稿した。

同年1月に洗足学園音楽大学の特別演奏会に於て「協奏三章“鼓神”〜和太鼓と吹奏楽のための〜」を初演したのだが、そのリハーサル過程の中で、この作品を和太鼓と打楽器アンサンブルでも出来ないかとの構想が持ち上がった。東西文化のコラボレーションという観点や、打楽器という現代音楽にとって最もグローバル且つ先進的な形態で作品を創造出来ることは、作曲者にとっても大変有意義なことで、早速作業に取り掛かった。

同じ「タイコ」という楽器同士であっても、全く文化的背景が違い、更に奏法や構造までも視点の違う2つの世界を1つの作品に反映することは、とても冒険ではあったが、演奏者の魂を喚起し、そこから聴衆へとエネルギーが伝わる作品をテーマに創作を進行した。「協奏三章“鼓神”」では林英哲氏を独奏者とした協奏曲であったが、この「鼓神Ⅱ」も林氏を独奏的ポジションにし、田楽スタイルの桶胴と和太鼓、そしてそれらを取り囲むようにティンパニと鍵盤系打楽器を中心とした西洋打楽器が配置されている。

現在、和太鼓は欧米をはじめ諸外国で最も普及されている日本文化の1つとなっている。これは世界中で活動している林英哲氏の功績でもあるが、今その文化の交流による新たな一歩が動き始めることへ、作曲者として大きく期待し祈念して

おります。

■プログラム

オープニング

- ・大会の紹介(映像による本大会の紹介)
- ・大会会長挨拶(嘉田由紀子滋賀県知事)
- ・主催者挨拶(舛添要一厚生労働大臣、代読・寺尾徹:厚生労働省自立支援振興室長)



嘉田県知事



寺尾室長

M1 「鼓動」(作曲・水野修孝)

演奏 林英哲 + 中谷満 *「沈黙の生命」



M2 「鼓～指揮者と8人の打楽器奏者のために～」(作曲・水野修孝 指揮・中谷満)

演奏 シュレーゲル

M3 「ドラミング Part1」(作曲・スティーブ・ライヒ)

演奏 シュレーゲル

M4 「打響聲應～6人の打楽器奏者のための～」(作曲・和田薫)

演奏 シュレーゲル



M5 組曲「濤の蓮2008」(作曲・構成・演出 林英哲)

演奏 林英哲 + 英哲風雲の会



M6 本大会委嘱作品「和太鼓と打楽器アンサンブルのための鼓神Ⅱ」(作曲・和田薫)

演奏 林英哲 + 英哲風雲の会 中谷満 + シュレーゲル *「沈黙の生命」



◆アンケート集計（回収 113 件）

- 1)性別 ①男 35 名 ②女 78 名
- 2)年齢 ①小学生 7 名 ②中学生 4 名 ③高校生 12 名 ④20 歳代 14 名 ⑤30 歳代 14 名
⑥40 歳代 17 名 ⑦50 歳代 22 名 ⑧60 歳代 15 名 ⑨70 歳代以上 4 名 無回答 4 名
- 3)住まい ①栗東市内 13 名
②県内 84 名（近江八幡 2 名、大津 31 名、草津 9 名、甲賀 13 名、湖南 11 名、長浜 2 名、東近江 4 名、彦根 3 名、守山 9 名）
③県外 16 名（愛知 2 名、大阪 3 名、京都 7 名、兵庫 2 名、福井 1 名）
- 4)きっかけ ①チラシ 21 名 ②さくら案内 4 名 ③新聞 7 名 ④ネット 4 名 ⑤テレビ 1 名
⑥知人・友人の紹介 41 名 ⑦職場の紹介 17 名 ⑧その他 23 名

5)感想等(抜粋)

- ・鼓神Ⅱ プラボー！です。和太鼓がすばらしく感動しました。
- ・全て大大大大感動しました。胸が高鳴り興奮しました。
- ・全てのプログラムに感動した
- ・太鼓の演奏を子供に聞かせたく参りましたが、演奏の素晴らしさはもちろん、障害者の皆さんのことを考える機会ともなり大変充実したひと時となりました。
- ・素晴らしいオープニングでした。滋賀の福祉についてもこうして伝えていくことが大切なことだと感動しています。
- ・どの曲もエネルギーで良かった。元気が湧いてきたり神様がでてきそうな感じでした。映像も楽しくみました。優しかったり情熱的だったりして曲に合わせてうまくできたのもよかった
- ・すばらしかった。滋賀県のとりくみ、文化水準の高さに感動しました！
- ・鼓神Ⅱ、男らしくて素敵でした。娘(養小2年)もワークショップに参加させたいです。
- ・とても素晴らしかった。心にひびくものがありました。もう一度ききたい。
- ・鼓神Ⅱ。パフォーマンスの入ったパーカッションの演奏が初めて聞いたが、情熱の中にも和のエッセンスがあふれていてすばらしく、息もぴったりで良かった
- ・鼓神Ⅱ、大編成でよかったです。
- ・全てが心に響いた。私たちが知らず知らずに引いてきた境界線が解放された感じがした。
- ・すばらしい、音楽と造形のコラボ。特に鼓動・漣の蓮 2008・鼓神Ⅱがみんなの心が響き合いました。
- ・全ての演目において迫力に圧倒された
- ・どの演目も迫力があり強さを感じた。心と体が一体となっているような姿に感動した
- ・全てすばらしいの一言。今日ここに来られて最高に幸せ、感謝です。大会の成功をお祈りしております。
- ・会場全てがのみこまれるような響きでした。
- ・林英哲さんの太鼓が聞きたくてチケットを買ったので、想定外のいろいろな展開に驚きました。こんなコンサートは初体験でしたがすばらしかったです。
- ・沈黙の生命が楽しかった。躍動感あふれる演奏ですごかったです。
- ・沈黙の生命は感動そのものでした。みなぎるパワー全開で魂そのものがいやされた。

記念図録集作成および全国公募

記念図録集『アートはボーダレス』

記念図録集別冊『アウトサイダーライブ』

第8回 全国障害者芸術・文化祭 滋賀大会
アートはボーダレス

1. 全国公募の概要

■公募の目的

誰にも知られずに、一人で黙々と創作活動を行っている、新しい表現の可能性を秘めた“未知の制作者”を発掘することを目的に実施した。全国47都道府県からひとりでも多くの“未知の制作者”が登場し、記念図録集刊行によって国内はもとより海外まで広く紹介され、大きな飛躍の場をえることを願い、公募を実施した。

■応募対象

基本的には「障害のある人たちの表現活動」を対象としたが、今大会では「正規の美術教育を受けたことのない制作者」であれば特に制限を設けないこととした。作品のジャンルについても、平面でも、立体でも、なんだか分からないものでも、移動できないものでも何でもOKとした。

参考として、右記の通り、いままでの展覧会などで紹介された注目の制作者たちの特徴を並べ、アートに制約はなく、アートの可能性は無限であることを強調した。

<制作者及び作品の特徴>

- * 誰から強制されるわけでもなくずっと長く同じ創作を続けている。
- * ひとりの時間に、ひとりの場所で、ひとりで創作している。
- * 誰からも描き方や作り方を教わったことがない。
- * ある日突然、創作を始めた。
- * 表現の源は本人しかわからない強いこだわり。
- * いままで一度も見たことがない独創的な表現。
- * 一度見たら目に焼き付いて、頭から離れない。
- * 常識的な美術作品には見えない。

■作品公募期間

平成20年6月2日(月)～8月25日(日)

- * 応募に対する問い合わせが、締め切り間際に多く寄せられたこともあり、締め切り期限を大幅に延長し、可能な限り応募を受け付けることとした。

■選考方法<編集会議>

当初は編集委員を組織して、記念図録集への収録、展覧会への出版に向けて、第一次選考・資料審査～第二次選考・訪問取材～作品撮影といった流れを想定していたが、編集会議において、本大会の趣旨・目的等を踏まえて協議した結果、全応募作家の作品を図録集に収録・掲載することとした。各作家の掲載する作品数については、編集会議の中で、一定の評価軸により決定していくこととした。

編集委員については、本大会実行委員会より4名の委員に、外部より「アウトサイダアート」をはじめとして「表現活動」に関わる各分野で活躍されている6名をお招きして、計10名の構成で記念図録集の制作に取りかかることとした。

- * 別表プロフィール参照

■公募の周知先

- ①全国47都道府県ならびに全国の市町村の障害福祉主管課を通じて障害者施設、団体
- ②後援団体(全国組織の障害福祉関係団体)
 - * ①②はこれまでの大会と同様の周知方法
- ③日本精神科看護技術協会加盟施設(全国)、全国の精神障害者社会復帰施設

日本精神保健福祉協会、訪問看護ステーション

- * (社)日本精神科看護技術協会(日精看)の全面的なバックアップをいただき、これまであまり注目を浴びてこなかった精神障害の分野からの新たな作家、作品の発掘をめざした。

日精看主催の学会の会場において、展覧会を開き、学会に参加している精神科の看護師などに実際の作品を見てもらい、それぞれの病院で創作されている作家や作品を紹介してもらった。



■応募方法

応募用紙に必要な事項を記入し、応募作品の写真を貼付して、料金別納の封筒を使用して応募してもらった。

作品の送付については、写真などデータもしくは、コピー等プリントしたものを送付してもらい、編集会議で協議をした上で、図録集への掲載予定の作品現物を送付してもらい、写真撮影を行った。

2. 応募状況

富山県、愛媛県を除く45都道府県から、500名を超える人たちから応募が寄せられ、作品のジャンルも絵画や陶芸などの造形作品に限らず、クラフト作品、ティッシュペーパー等様々な素材を活用しての造形作品など多岐にわたる作品群が送られてきた。また、詩集や散文詩、音楽やダンスなどの表現のジャンルからの応募もあった。送られた作品は5000点を超えた。

これまでの大会と異なる点では、図録集を作成すること自体初めての試みではあったが、今大会では公募の周知の段階で、精神障害分野への呼びかけに力を入れたために、全体の約3割を超える応募があった。



■応募者数

551名

* 後に図録集掲載の辞退者9名含む。

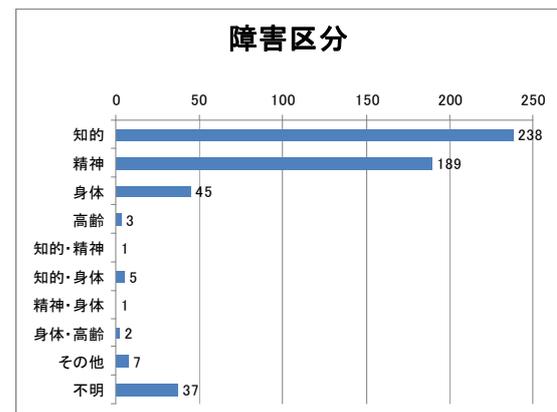
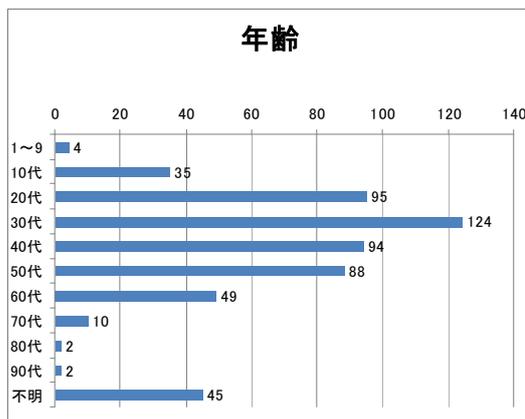
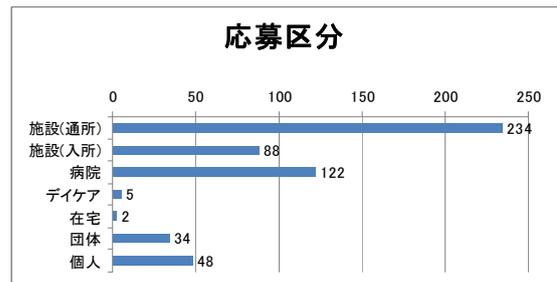
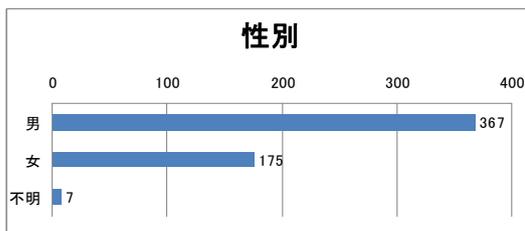
* 都道府県別 ・滋賀県内(92名) ・滋賀県外(459名)

* 障害種別 ・知的障害(238名) ・精神障害(189名) ・身体障害(45名)
・高齢者、児童、重複障害等(79名)

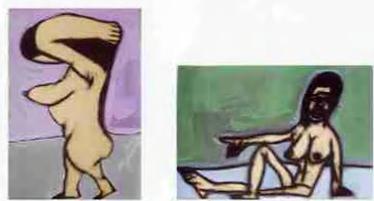
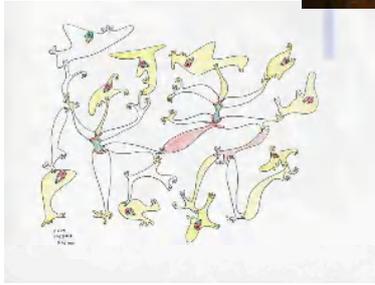
■応募作品

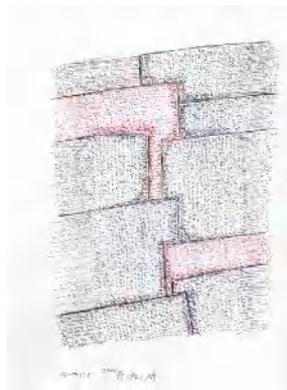
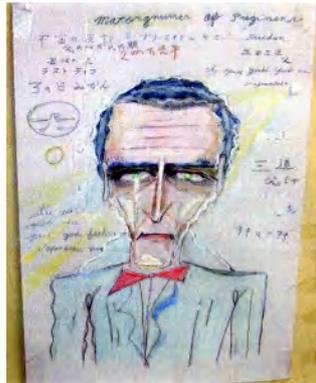
5255点

■応募データ



■応募作品(全作品から抜粋)





3. 記念図録集の制作

■編集委員の組織

- * 順不同。記念図録集のプロフィールより抜粋。
- * 太字は本大会実行委員。

今井祝雄	美術科、成安造形大学教授。もと具体美術協会会員。1966年、第10回シェル美術賞一等賞受賞。以来、内外の展覧会に出品多数。新大阪駅前や関西文化学術研究都市ほかにパブリックアートを制作、大阪市都市環境アメニティ表彰。住吉万葉歌碑、永田耕衣文学碑のデザイン、「夢創館」の後送設計も手がける。ボーダレス・アートミュージアムNO-MA運営委員長。
小暮宣雄	23年間公務員生活。後半は文化政策や地域芸術環境づくり。文化ホールに西洋クラシック音楽以外の企画が必要だと思い、演劇ダンスなど先端的アートを数多く鑑賞・体験。メモとして残すことから、鑑賞する目線を大切にすアーツマネジメント研究へ進む。現在は京都橘大学で教え各地域の文化提言に関係し、めくるめく紙芝居などを企画。ボーダレス・アートミュージアムNO-MAや栗東芸術文化会館さきらの運営委員。
はたよしこ	絵本作家。西宮市の障害者施設すずかけ作業所に押しかけボランティアとして、アートサポートをスタートし、以来、国内外でアウトサイダーアート作品を発掘し、さまざまな展覧会等で紹介、発表している。ボーダレス・アートミュージアムNO-MAアートディレクター。
北岡賢剛	社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団理事長。本大会実行委員会副委員長。
代島治彦	映像ディレクター/プロデューサー。2006年から国内のアウトサイダーアートの作家の創作現場を撮影し続ける。16名の作家の映像をまとめた短編作品DVDシリーズ『日本のアウトサイダーアート』として発表。その後撮影した精神科病棟の作家も含む17名の短編作品をDVDシリーズとして発表する予定(2009年夏)。
大西暢夫	写真家。1990年代前半からダムに沈む村を記録し続け、写真と映画で発表。2001年から精神病院に長期入院する人々の姿を撮影し、看護専門誌に連載。2004年に写真集『ひとりひとりの人 僕が撮った精神科病棟』を出版。現在、アウトサイダーアートの撮影を多数手がけている。
アサダワタル	日常編集家。「大和川レコード」名義で活動。「日常再編集」をテーマに、様々なパフォーマンスや実社会に根ざしたアートプロジェクトを制作。同時に、CMや映画音楽での演奏、書籍やラジオ、映像等のメディア編集を手がける。大阪府現代芸術創造事業「築港ARC」チーフディレクター。
高石 巧	グラフィックデザイナー。ボーダレス・アートミュージアムNO-MAで開催されている企画展の広報物のデザインを多数担当している。
末安民生	東京都立松沢病院に看護師として勤務の後、衆議院議員秘書、民間クリニックを経て、現在慶應義塾大学看護医療学部準教授。(社)日本精神科看護技術協会副会長。精神障害者の止むに止まれぬ日常生活からほとばしるエネルギーとしての「表現」と出会い、作品の紹介活動にも力が入る。
山田宗寛	社会福祉法人おおつ福祉会唐崎やよい作業所所長。1990年前半造形活動の担当者として、ケンカの造形活動の指導者から教えを受けつつ、「アウトサイダーアート」のムーブメントに関わり、施設では「アトリエ時空」として活動を展開。若手の造形担当者と共に、障害のある人の作品や表現の現在進行形の姿を新しいかたちで発進している。
井上多枝子	京都精華大学造形学科用賀コースを卒業し、知的障害者入所授産施設信楽青年寮にて、「造形物研究所」というアトリエを担当し、利用者が創作したさまざまな作品を展示する展覧会を企画し、全国で開催。現在、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAを担当し、国内外の障害のある人たちのアートについての調査、展覧会企画などを行っている。

■編集会議 4/17 5/19 6/29 7/24 8/21 9/11、12 10/21 11/26 12/25 計10回

■編集方針

応募作品が絵画や陶芸などの造形作品に留まらず、様々なジャンルの作品の作品が寄せられ、その中には、音楽作品や身体表現といったパフォーマンス系の応募もあり、編集会議の議論の中から、絵画など造形作品などのいわゆる視覚芸術(ビジュアルアーツ)と、舞台などでの音楽やダンス、芝居などの実演芸術(パフォーマンスアーツ)とを分けて、それぞれの分野の作品(活動)を効果的に紹介ができるように2冊セットでの制作をすることとした。

したがって、今回の公募により寄せられた作家、作品を掲載する記念図録集『アートはボーダレス』と別冊という形で『アウトサイダーライブ』を制作・刊行することとした。

また、『アートはボーダレス』では、作品のみの収録ではなく、編集委員の訪問取材により、作家が創作している様子なども掲載すると共に、「アートの力で何ができるだろう?」と題した座談会を開催し、その内容を掲載した。

座談会には、作家の田口ランディ氏をお招きし、編集委員3名とで行った。

一方、『アウトサイダーライブ』では、全国で様々なジャンル、手法で活動しているグループを地域別にピックアップして紹介していくことも主な目的とした。当初はDVDを通じて映像で紹介していこうと考えたが、紹介する表現活動がすべて「ライブ」で行われており、その迫力や雰囲気などは直接その現場に居合わせないと体感できないことから、『アウトサイダーライブ』を読み物として制作をし、その読者が読んだ後に、実際の「ライブ」を見に行こうと感じてもらえるような内容にすることとなった。

4. 『アートはボーダレス Borderless Art-Collection』

■仕様

A4版変形(280×210mm) 全344ページ

■デザイン 伊勢功治 ■編集管理 代島治彦 ■印刷 (株)スマイ印刷工業 ■助成 日本財団

■掲載作品

作家総数 554名(集団制作を含む) 作品総数 600点(掲載画像数)

■編集構成

●図録集刊行にあたって

山田登志夫 (厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課自立支援思考室長)

●「アートはボーダレス」発刊に際して

久保貞雄 (第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会実行委員会委員長)

●あらためて障がいの有無をこえて

今井祝雄 (美術家/成安造形大学教授)

●「アートはボーダレス」、その名の旅のはじめに

小暮宣雄 (京都橘大学教授)

●記念図録集「アートはボーダレス」作品公募を終えて

井上多枝子 (ボーダレス・アートミュージアムNO-MA)

●記念図録集掲載作家リスト

●作品紹介(エリア別)

北海道/東北/関東/甲信越・北陸/中部
滋賀県/関西/中国・四国/九州・沖縄

●この人が障害者でないとしたら、どんな人なのか。

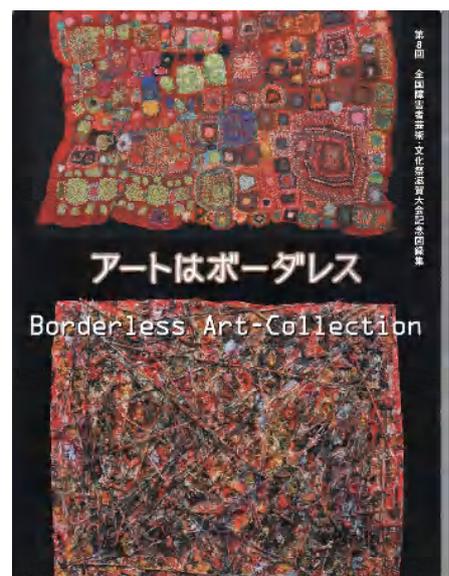
末安民生 (日本精神科看護技術協会副会長)

●それは滋賀から始まった…

山田宗寛 (社会福祉法人おおつ福祉会唐崎やよい作業所長)

●座談会「アートの力で何ができるだろう? ~ 記念図録集「アートはボーダレス」がなげかけるもの~」

はたよしこ(絵本作家)+田口ランディ(作家)+大西暢夫(写真家)+代島治彦(映像ディレクター)



4. 『アウトサイダーライブ』

■仕様

A4版変形(280×210mm) 全128ページ

■デザイン イガキアキコ ■編集管理 アサダワタル

■印刷 (株)スマイ印刷工業 ■助成 日本財団

■編集構成

- アウトサイダーライブは、境界を揺らして魅せる。

小暮宣雄

- 【現場レポート】「糸賀一雄記念賞第七回音楽祭」

アサダワタル

- 関西・京都 めくるめく紙芝居プロジェクト

林 加奈

- 関西・大阪 ほうきぼしブラザースとちんどんチャンス！

マキクニヒコ

- 関西・兵庫 音遊びの会

沼田里衣

- 【特別コラム1】言葉にし難い身体に出会うには

細馬宏通

- 関西・滋賀 糸賀一雄記念賞音楽祭

西川賢司

- 【特別対談】ボーダーを揺らすアウトサイダーライブの可能性 ～関西の事例から～

林 加奈×ナキクニヒコ×沼田里衣

- 北海道 のほほん工房 ダメダメ団 ～“孤独からの解放”という名の一枚のCDについて～

たなかそいち

- 東北・宮城 Inclusive Dance for All ～インクルーシブダンスは全ての人のために～

定行俊彰

- 関東・東京 ソケリッサ！

アオキ裕キ

- 【特別コラム2】他人の中を流れる(自分とは異質の)時間の流れを探索すること

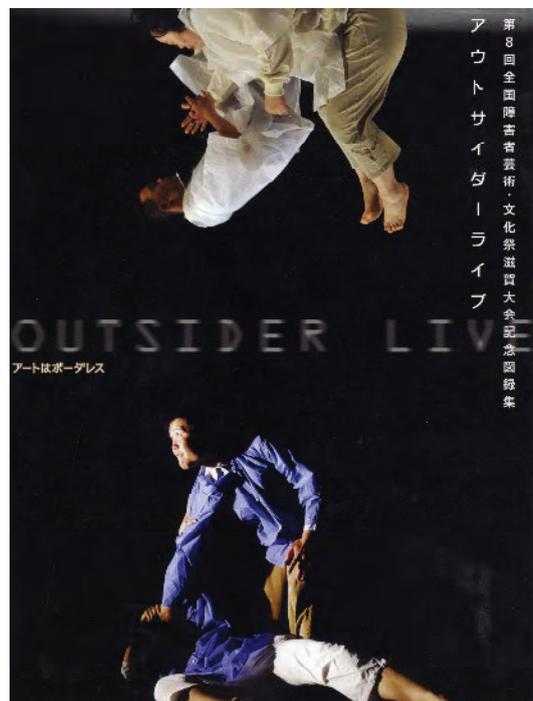
志賀玲子

- 中国・広島 社会福祉法人創樹会 アートセンターきらり

クシノブマサ

- 九州・宮崎 みやざき◎まあるい劇場

永山智行



公募展『独走羅列-どくそう-られつ-』
開催報告

1. 公募展の開催

前項の記念図録集の全国公募により、寄せられた作品群の中から、企画テーマに適した作品を選定し、展示構成を練り上げ、滋賀県立近代美術館との連携により開催した。

■開催状況

- ・会 期 平成 20 年 11 月 11 日(火)～11 月 24 日(月・祝) 計 13 日間 * 月曜日は休館
- ・会 場 滋賀県立近代美術館ギャラリー (滋賀県大津市瀬田南大萱町1740-1)
- ・観覧者数 2, 118名
- ・企画構成 井上多枝子 (ポータルレス・アートミュージアムNO-MA)

- ・協力団体 (社福)もみの木福祉会ほっと茶町 発達協会 地域生活サポートセンターパツリ
 (社福)かりがね福祉会風の工房 細木ユニティ病院ダイケアフレンズ 北信総合病院
 (社福)やまなみ会やまなみ工房 (社福)創樹会アートセンターきりり (社福)愛敬会
 (社福)愛成会 ポータルレス・アートミュージアムNO-MA((社福)滋賀県社会福祉事業団)

■コンセプト

自分が、ひとりで、勝手にやっていること。独創的な作品は、周りと比べない世界から生まれてくる。迷いなく、他人と比べない中で、同じことを毎日のように繰り返す。区別できない理性と本能の揺れ動中、ただ、手だけが動いている。そこには、人間の奥底にある、普遍的なエネルギーが渦巻いている。

そんな<ひとりっ走り>の独走を羅列する。

■展示構成

応募者の全作品の中から、本展のコンセプトに適した13名の作家の作品を選出し、展示する。また、全応募作品を画像(スライドショー)によりモニターに映し出し、また音楽作品についてもCDラジカセでヘッドフォンを設置し、作品の紹介を行った。

■出展者 (計13名)

- ・足立伸一 (鳥取県・絵画)
- ・伊藤賢士 (東京都・絵画)
- ・伊藤峰尾 (福島県・文字)
- ・内山智昭 (長野県・陶芸)
- ・岡林美喜子 (高知県・絵画)
- ・鎌江一美 (滋賀県・陶芸)
- ・北島雅臣 (長野県・絵画)
- ・橘高博枝 (広島県・絵画)
- ・木本博俊 (愛知県・絵画)
- ・楠葉亜樹 (広島県・絵画)
- ・鱸万里絵 (長野県・絵画)
- ・山西敏子 (東京都・絵画)
- ・山際正己 (滋賀県・陶芸)



■その他

出展はされなかったものの、本大会の全国公募で応募された全作家の作品を1点ずつスライドショーでモニターにより上映し、紹介した。また、音楽作品についても、CDプレイヤーにより、ヘッドフォンで鑑賞してもらった。

2. 出展作品

足立伸一



伊藤賢士



伊藤峰尾



岡林美喜子



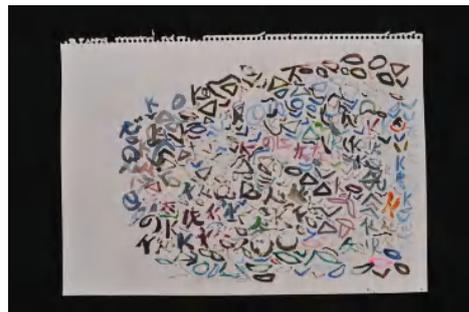
鎌江一美



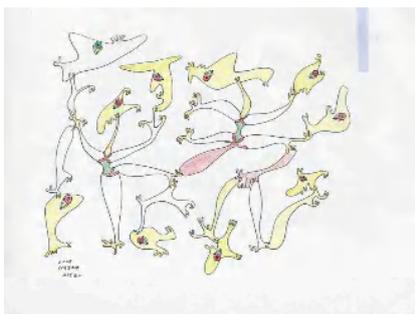
内山智昭



橘高博枝



木本博俊



楠葉亜樹



山際正己



鱸万里絵



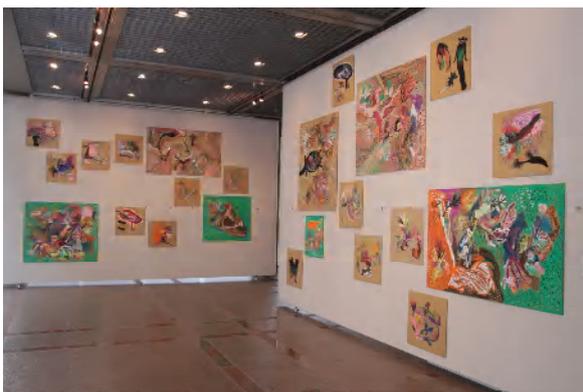
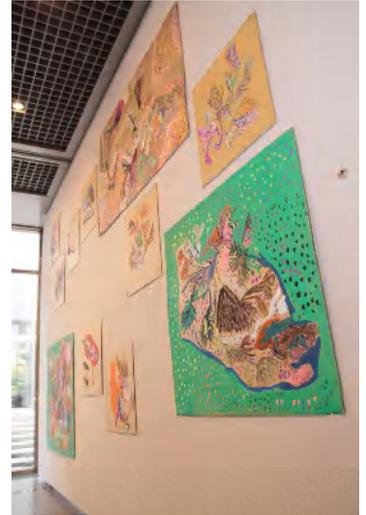
山西敏子



北島雅臣



3. 展示風景



4. 関連イベント

① オープニングセレモニー & ギャラリートーク

本大会の大きな目玉行事でもある本展覧会の開催にあたり、オープニングセレモニーを行い、主催の厚生労働省、滋賀県からの挨拶に、出展作家の紹介やテープカットなども行った。セレモニーの終了後は場所を展示会場(ギャラリー)に移して、セレモニーの参加者に向けて作家本人も交えたギャラリートークを実施した。

- ・日 時 平成20年11月11日(火) 13:00～
- ・会 場 滋賀県立近代美術館ロビー
- ・出席者 東秀明(厚生労働省社会・援護局健康保健福祉部企画課自立支援振興室)
 澤田史郎(滋賀県副知事)
 久保貞雄(第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会実行委員会委員長)
 出展者10名、関係者、マスコミ、など 約130名



主催者、出展者とのテープカット



久保貞雄委員長 挨拶

作家本人と企画者とのギャラリートーク



②田ロランディ氏によるギャラリートーク

作家田ロランディ氏をお招きしてのギャラリートーク。企画者の井上との対談形式で、障害のある人たちの表現についての意見を交換した。

- ・日 時 平成20年11月23日(日) 15:30～17:00
- ・会 場 滋賀県立近代美術館ギャラリー
- ・参加者 29名



(左)田ロランディ女史

障害のある人たちの表現活動に関するフォーラム 開催報告

シンポジウム
「障害者による表現活動の未来～糸賀の福祉実践を原点として～」

1. シンポジウム『障害者による表現活動の未来～糸賀の福祉実践を原点として～』

本大会が今回は滋賀県で行われるため、滋賀県における芸術文化活動の取り組みを中心にシンポジウムの内容を組み立てた。

滋賀県内での取り組みについて、歴史的背景を検証しながら紹介する上で、我が国の障害福祉の先駆者でもある故糸賀一雄氏にスポットを当て、氏が創設した近江学園での造形活動から現在のアウトサイダーアートの流れに沿って、議論を進めていくこととした。

そのため、氏の功績を讃え、創設された「糸賀一雄記念賞」の授賞式に関連づけて実施した。

■内容

糸賀一雄氏が近江学園を創設してから今日に渡って滋賀県で取り組まれてきた芸術文化活動などに触れながら、障害者の造形活動を支える側、同じアーティストとしての立場、メディアを通して彼らの表現を第三者的に紹介していく立場の三者により、障害のある人たちの表現活動の現状と未来への可能性について検証した。

- ・コーディネーター 小暮宣雄（京都橘大学現代ビジネス学部教授）
- ・シンポジスト 山田宗寛（社会福祉法人おおつ福社会唐崎やよい作業所所長）
林 加奈（音楽家、画家、紙芝居師）
代島治彦（映像ディレクター、カメラマン）

■開催状況

- ・日時 平成20年11月18日(火) 13:00～17:00
- ・会場 ピアザ淡海 ピアザホール（大津市におの浜1-1-20）

■参加者 268名 *主に障害福祉関係者

■スケジュール

- 13:00 第12回糸賀一雄記念賞授賞式式典（挨拶・表彰、受賞者スピーチなど）
- 15:15 シンポジウム開始
- 17:00 終了

■協力

(財)糸賀一雄記念財団 糸賀一雄記念賞企画検討委員会



小暮氏



(左から)山田氏、林氏、代島氏

第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会 シンポジウム

「障害者による表現活動の未来～糸賀の福祉実践を原点として～」

平成20年(2008年)11月18日(火) ピアザ淡海・ピアザホール

コーディネーター 小暮宣雄 氏

シンポジスト 山田宗寛 氏 林 加奈 氏 代島治彦 氏

近江学園との「場所」「時代」「人」の結び目から生まれたアウトサイダーアート

小暮

障害者の表現活動がこれからどうなるのか、それは滋賀県で糸賀先生の実践の中から生まれたものですが、その歴史を踏まえながら未来はどんなかたちになるか、それによってどんな夢が語れるのか、滋賀に所縁のある三人のメンバーとともに話し合っていきたいと思います。

まず今に至る障害者の表現活動がどうなってきたか、どういうふうに見守り関わってこられたかについて、それぞれの立場からお話しいただきたいと思います。

山田

滋賀県の造形活動は日本でアウトサイダーアートが登場するより前に脈々と取り組まれていました。50年近くにわたって作品が作られ続けて、クオリティーの高い作品が生まれているのは、糸賀先生たちの施設づくり、そこでの教育や実践が受け継がれているからだと思います。

糸賀先生は実に多くの人と交流されて、近江学園にボランティアとして多くの人々が来られて、学園そのものが発する魅力となり、優れた作品が生まれました。

作品がどうやって生まれたかを、「場所」「時代」「人」の三つのキーワードで説明しますと、滋賀県は隣が文化の発祥地・京都です。また近江学園は信楽とも山続きの場所にあり、良質の粘土が採れたことから窯業の取組が始まりました。

「時代」ということでは、この頃は京都では民芸運動に始まる工芸の運動、八木一夫さんらの前衛芸術につながる走泥社、山下清が式場隆三郎さんによって見いだされたりと、時代が動いている時でした。メインストリームなところと近江学園はつながっていました。

三つめの「人」は、実に多くの方が近江学園に関わっていました。糸賀先生は職業訓練とか自立を目的に窯を築かれましたが、その窯が温度の上がらない失敗だったために、園児たちが自由に作品を作り出したのが造形作品の初めです。それに田村先生が目ざされ、48年くらいには一年間だけ八木一夫さんがボランティアで関わっていました。

八木さんは皿や茶碗の世界からオブジェを出現させた前衛作家で、自身でも不良を自称されていたようで、職員からは破廉恥な人と評される面もあったそうです。しかし、子供の良さを見抜いて指導されたと聞いています。土に水がしみ込むように造形活動が広がっていき、人との交流など、クロスオーバーしたところで優れた活動を生み出しました。糸賀先生はこうした「場所」「時代」「人」というものと近江学園の結び目を作っていかれた方です。

また、施設で作品が作られるというイメージは外国の方にはないようで、施設福祉と障害者の芸術活動というのは、日本の障害者アートを語る時に欠くことのできない視点だと思います。

小暮

八木さんが破廉恥な人と思われながら、受け入れられた器の柔軟さ、アーティストが社会とどう関わっていくか、自分の表現を大事にしつつ、どういう形で自分を伝えていくか、社会の結び目をつないだり、ほどこたりできるか、そういう大きな問題にも触れられたと思います。

次に施設と対極にある自由な表現者の立場にある林さんからお願いします。

いろんな表現の形を自由に出せる場所作りをめざして

林

山科を拠点に行っている「めくるめく紙芝居」は2006年に始まりましたが、きっかけは2005年に「まちかど紙芝居」というプロジェクトで私が紙芝居ディレクターをしたことです。そのとき私は音楽家・画家として活動していましたが、コンサートではパフォーマンス要素の強いことを色々していたし、展覧会ではお客さんと話をするうちに作品のストーリー性に変化していくような活動もしていましたので、紙芝居という総合芸術は自分にピッタリなメディアだと思いました。このときに、まちの人々とコミュニケーションをとることから作品を作ってみようということで出会ったのが、知的障害者と親とヘルパーさんによるサークル「太陽クラブ」でした。「めくるめく紙芝居」は、太陽クラブを中心とした「障害者」と呼ばれている人たちと、京都橘大学でアートマネジメントを学ぶ学生と、アーティストたちが、水平な立場で紙芝居を基軸とした舞台芸術作品を作るプロジェクトです。

新作公演に向けては、だいたい年に20回、1回につき3時間くらいのワークショップをしており、基本的には楽器や絵の準備をして自由に活動してもらいます。時々「こんな絵ができたからテーマソングつけてみようか」と言ってみたりするなど、全体で何かを一緒にやったりもします。そういう様子を映像や文章で記録しておいて、時々スタッフミーティングを開き、描いてきた絵や出てきた面白いエピソードをなるべく捨てずに使えるようなストーリーを作り出し、どうやったらその面白さを観客に伝えられるのかということを考えます。そのために配慮しているのが、場づくりと編集です。人はひとたび却下・否定されるとのびのびできなくなり、ものすごくアイデアが出にくくなるものだと感じていますから、まずは誰も否定をしないようにします。

それから、作品を仕上げしていく段階の編集作業を、そぎ落とすのではなく、殆ど何も捨てずに、かつ、より面白くするようにしています。

あと広報ですが、「障害者」と呼ばれている人たちにも「健常者」と呼ばれている人たちと同じように「ごく一般」として公演情報などを届けたかったのですが、そうするためには「障害者」と呼ばれる人たちには特別な広報を行わないといけないことに気づかされました。社会的区別や差別がすでにあることを意識しないと、最終的に水平に情報を行き届かせられないのです。

小暮

私もアートマネジメントという部分で一緒にやっています。アートマネジメントとアーティストと障害者とヘルパー、一応の区別はあるんですが、やっているとあまり気にならない、意識の下に眠っていく感じがする、めくるめくというのはそういうつもりで付けたんだと思います。

障害者の芸術は美術、陶芸、音楽、ダンス、いろいろあるんですが、林さんはクロスオーバーして、一人何役もできるアーティストです。私たちも、気がつくと無意識にいろんな芸術の形をやっています。そういうものを、もっと自由に出せる場所をめざしてこれをやっています

ノーマライゼーションからアートがメインテーマになるまで

小暮

見守る人の立場から、障害者のいろんな芸術表現をどういうふうに見てこられたかということ、代島さんに紹介していただきます。

代島

今日は障害者の表現活動をどう記録してきたか、障害者アートのメディア史みたいなものを紹介したいと思います。約40年前柳沢寿男監督が、びわこ学園で「夜明け前の子供たち」という映画を作っています。貴重な映画です。

その後、1989年に西山正啓監督が信楽青年寮にほぼ1年間住み込んで、映画を作りました。まだアートが主役じゃなくて、障害のある人が地域にどう出て行くか、地域がどう受け入れていくか、共に生きる社会をどう作るか、その頃バリアフリーやノーマライゼーションが言われ出した時代ですが、アートはボーダレスというより、暮らしはボーダレスということがテーマでした。そういう意味で、障害者の表現活動はその一つの手段ではないかというのが、ほのかに見えていた時代ではないかと思います。メインではないけれど、アートの風がこの映画「信楽から吹いてくる風」から吹き始めたのではないかと思います。

この映画は全国で自主上映されて、人の出会いと交流があり、障害者の表現活動に興味のある人がネットワークを作っていました。さまざまな展覧会が開かれ、アートを主人公にした映画が作られるようになり、福祉の世界を飛び越えて一般の人の目に触れるようになりました。

そういう時代を象徴する映画が、1998年と2001年に作られました。佐藤真監督がアートとして描けないかということで作った映画、「まひるのほし」と「花子」です。

彼らは映画の中でアーティストとして存在しています。10年の間にアートの風が吹き始めて、人がつながっていった障害者アートが目されるようになりました。

彼らはいつ表現をやめるかわかりません。有名になりたいとか、売りたいという欲望がないので、すぐやめられるんです。だからこそ今やってる人、今の作品を記録し、残していきたいと思っています。

小暮

実は表現というのはジャンルに関係なく、あるいはいろいろなものが混じって絵が描かれ、描かれる姿はまた踊りであり、おじぎをする姿はお芝居です。映像で記録することで、痕跡として貴重な作品を残してもらっていると思います。

糸賀先生の本の中に「技術が子供を選ぶのではなく、子供が技術の主体になるということが言えるようになるのである。ヒューマニズムの中身はこれではいけない。その思想を自分たちのものにしていき、中身を充実させていくことこそが関係者の生き甲斐になっていくのである。私たち福祉の問題を通して世界に問い問われる姿勢を築きたいと思ったわけである」という一節があります。

技術は広い意味でアートからきたことばです。表現とか生活そのものの術は、子どもや障害者を選んだり試したり順列をつけるものではなく、子どもや障害者がどういふふういろいろな術の主体になればいいのか、これがまさしく原点ではないかと思います。それは福祉に関わる人々の生き甲斐になり、伝えられた他のいろいろな人々の生き甲斐になる、世界と対話することが、障害者の表現から起きているということが書かれています。

職員、アーティスト、地域住民がつながり障害者アートの方向性を見出す

小暮

ここからは現在から未来へというテーマで、また三人のお話を聞きたいと思います。

林

先日の糸賀一雄記念賞音楽祭では、よくこれだけのことをやってるなあと感じると同時に、正直物足りなさもありました。身内じゃない人に届けようという意識が弱いのではないかと思います。例えば「福祉」ではなく「アート」として面白そうと思ってもらえる広報ができていくということなどです。

アーティストやアートマネジメントの専門家が現場に介入することは重要だと思いますが、一気にそういう状況を整えられとも思えません。そうすると、施設の職員さんたちがプレゼンテーションの意識をしっかりと持っていく必要があり、そのためにはまず、職員さんたち自身がアートの楽しみ方をもっと獲得していかないといけないと思います。面白いことを伸ばせるのも、芽を摘んでしまうのも、現場の人の判断一つですから。

私の夢の一つは、戦争が無くなることなんです。すごくわかりにくいかもしれませんが、私のやっていることは最終的にそこに繋がっていきます。大学やプロジェクトや講習会などで、私がいいと思っていることや方法を伝えて、それに賛同してくれる人たちの手でそれが飛び火していったように、自分のワンアクションでどんな風に世界が変わっていくか見たいです。

小暮

糸賀先生は自分のやっていることが少しずつ新しい社会、すなわち理解と愛情に満ちた新しい社会形成につながるということを書いておられます。

次に施設側はアーティストをどう受け止めているか、障害者の表現をどうとらえるかといったことなどお話しいただけますか。

山田

アーティストと施設職員はファッション一つとってもセンスが違いますし、それほど身近な関係にあるとは言えません。利用者の表現が型をはめるような教え方で主体性を損なうことになってしまうのではないかと警戒することがあるのも事実です。今まで作品を社会に発信していくことを中心にやってきましたが、次は関心を持っている人たちとどうつながっていくか、社会の中で価値を持たせていくのか、一緒に考えていくべきだと思います。かつては表現の範疇に入らなかったものも対象に間口が広がり、どんどん放射線状に広がっていく時代ではないかと思います。違う分野の人と結びついて新しいものが生まれる、そこに今、評価や価値を求めるのではなくて、いろいろな人がつながって次の時代を準備することが大切です。

今、職員は厳しい局面におかれています。施設の中で芸術活動に取り組むことが難しい状況にあり、ゆとりもなく、文化に目がいきにくくなっています。施設職員が集まって「ing・・・展」をNO-MAでやっていますが、そこでは表現をどう扱っていくかという議論になっています。また、福祉の現状として職員が数年で退職し、なかなか造形活動が継続されないという状況にもあります。

糸賀という土地で腰を落ち着けて、芸術文化の方向性を作って、しっかりと引き継いでいく人を作らないといけないし、そうでなければブームで終わってしまいます。作品を見つける、本質を見つける、職員もそうだし、まわりの人も、地域も芸術家も大事なのではないかと思っています。

やっと灯ったアートの灯をブームで終わらせないために

山田

障害者アートをどう語るか、どう扱うかということで、最初から職員側に判断とか評価が委ねられています。障害を持った人がそこを主張することはなかなかできないので、職員の主観、見方に委ねられます。それだけにアーティストの人たちと対等に議論し合って次の何かを見つけていくことが大事だと思います。やっと灯った灯、次はどう変えていくかが自分たちの課題だと思います。

小暮

表現を通じてある意味では感情が爆発したりすることもあります。そういうことでトラブルがあったらどうしようかとか、プライバシーの問題とか周囲の目線のこともありますが、福祉側の人たちには一つひとつクリアしながら、さまざまな思いを持った人がいますので、いろんなアーティストに出会ってもらうことが大切だと思います。アートマネジメントはそのためにある、つなぎ手になる人、第三者の目が必要だと思います。見届ける、見守る立場からのお話を聞きたいと思っています。

代島

障害者のアートをどう見つめていくかは、確かに難しいです。価値を他人が握っているわけです。かなり主観的ですが、おもしろいものはおもしろいと言うこと、身近にいて発見しやすい立場にいる職員さんが大切だと思います。

鑑賞教育ですが、スイスのアール・ブリュット・コレクションに行くと、小学生が観に来ている。プログラムがちゃんとできているのですが、日本の場合子どもたちが障害者の表現活動を観に来るということがないと思います。実際に生のものに触れることが大事かなと思います。

創作風景や作品を記録して、どういうふうにとまとめるかと言うと、編集したりする時に主観は当然入ってきます。仕方ないことで、なるべく山田さんが言ったアウトサイダーアートのブームが長続きするように、テレビ番組を見ることがある意味で鑑賞教育になるように作っていきたいと思っています。

2004年にボーダレス・アートミュージアムNO-MAが生まれて、そこがアートの風、台風の目になりました。そことスイスのアール・ブリュットが提携して、昨年から今年にかけて行った巡回展を記録しました。それをテレビ番組で広く薄く、多くの人に伝えたいと思い、福祉番組でなく一般の人が普通に見ているニュースとNHKの日曜美術館という二つの番組で放送しました。

私自身ブームの煽り役にならないよう、さまざまなプロジェクトが同時進行で進んでいますが、障害者表現活動の発掘、収集、記録、保存に協力していきたいと思っています。

小暮

アートはボーダレスというテーマでいろいろ議論しましたが、まだまだボーダーばかりで、アートとライフがクロスオーバーしてボーダレスになっていくというのは、戦争がなくなるのと同じくらい難しいかもしれません。一つひとつ実践しながら、糸賀先生を原点としながらやるのがとても大事なことだと思います。

暮らしの中に美のタネを見つけるような、やわらかい私たちのあり方、福祉のあり方、社会のあり方が積み重なっていけば、琵琶湖のように輝いて美しい世界になっていくのではないかと思います。

ぜひ、この活動がいろんな人に波及することを願ってシンポジウムを終わりたいと思います。

バリアフリー映画祭 開催報告

1. 開催趣旨

本大会の最後のプログラムとして位置づけ、さまざまな障害のある方や高齢者、また障害のない方も心から映画を楽しんでいただくために、障害のある人たちのためだけでなく、みんなで楽しむための工夫を施した副音声や字幕付きの映画作品を上映した。単に映画鑑賞の機会を提供するのではなく、新たな映画鑑賞の方法を提案するとともに、当映画祭をきっかけに、「誰もが楽しく鑑賞できる映画環境」を議論する場が増えていくことを期待し、映画館での一般公開と同時にバリアフリー化された映画作品を上映することが一般化されるように、全国へ情報発信しながら提案していくことを目的とし、開催した。

2. 検討部会の設置

映画祭を運営するに際し、県内の関係団体から、委員を募り、聴覚、視覚に障害のある人たちをはじめ、誰もが楽しく鑑賞するための配慮すべき点などを検討する部会を実行委員会の下部組織として位置づける。

岡本幸助((財)滋賀県身体障害者福祉協会会長・本大会実行委員)

久保厚子((社)滋賀県手をつなぐ育成会会長・本大会実行委員会副委員長)

加藤直樹(きょうされん滋賀支部理事長・本大会実行委員)

梅原洋平(NHK大津放送局放送部長・本大会実行委員)

宮崎君武(滋賀県商工会議所連合会会長・本大会実行委員)

川瀬重雄(滋賀県商工連合会会長・本大会実行委員)

岸野 洋((財)滋賀県文化振興事業団理事長・本大会実行委員)

中西久美子((社)滋賀県ろうあ協会副会長)

曾我昌輝((社)滋賀県視覚障害者協会副会長)

前田眞理((社)滋賀県視覚障害者協会理事)

水流源彦(バリアフリーによる新しい映画鑑賞の技術開発研究会事務局)



3. 会期、会場及び鑑賞料金 等

【大津会場】

- 開催場所 ユナイテッド・シネマ大津(大津市打出浜14-30 大津パルコ7F)
- 開催時期 平成21年(2009年)2月21日(土)~3月6日(金)
- 開催時間 1日に2作品上映 * 開始時間 (1回目上映開始) 10:15 (2回目上映開始) 13:15
- 鑑賞料金 一般 1800円/高大生1500円
障害者・シニア(60歳以上)/小中生1000円/幼児900円
* 障害者への介助者については1名まで1000円
<特別鑑賞割引券> 一般 1300円 一般以外 800円

【彦根会場】

- 開催場所 ビバシティホール(彦根市竹ヶ鼻町43-1 ビバシティ彦根2F)
- 開催時期 平成21年(2009年)3月13日(金)~3月15日(日)
- 開催時間 1日に4作品上映(最終15日は2作品上映)
上映作品によって開始および終了時間が異なります。
- 鑑賞料金 一般 500円 一般以外 300円
* 一般以外は幼児、小中生、高大生、障害者、シニア(60歳以上)を含む。
* 障害者の介助者は1名までは一般以外とする。

4. 協賛、協力

- 協賛 ユナイテッド・シネマ大津(会場使用)、(株)ソナール(磁気誘導ループの設置)
- 特別協力 バリアフリーによる新しい映画鑑賞の技術開発研究会 (株)シグロ
NPO法人全国地域生活支援ネットワーク アメニティー・ネットワーク・フォーラム実行委員会
(社)滋賀県ろうあ協会 (社)滋賀県視覚障害者協会

5. 上映スケジュール及び鑑賞者

(大津会場・ユナイテッド・シネマ大津)

月 日(曜日)	1 回目上映	鑑賞者	2 回目上映	鑑賞者
2 月 21 日(土)	THE CODE/暗号-③	14名	猫の恩返し-③	2名
2 月 22 日(日)	ぐるりのこと。-①	4名	花はどこへいった-③	3名
2 月 23 日(月)	THE CODE/暗号-②	3名	絵の中のぼくの村-③	3名
2 月 24 日(火)	ぐるりのこと。-②	7名	花はどこへいった-②	3名
2 月 25 日(水)	絵の中のぼくの村-②	0名	猫の恩返し-②	5名
2 月 26 日(木)	絵の中のぼくの村-①	2名	花はどこへいった。-①	3名
2 月 27 日(金)	THE CODE/暗号-①	3名	猫の恩返し-①	2名
2 月 28 日(土)	ぐるりのこと。-②	10名	絵の中のぼくの村-③	10名
3 月 1 日(日)	花はどこへいった-②	4名	猫の恩返し-②	13名
3 月 2 日(月)	THE CODE/暗号-②	5名	絵の中のぼくの村-②	2名
3 月 3 日(火)	ぐるりのこと。-①	9名	花はどこへいった-①	0名
3 月 4 日(水)	猫の恩返し-①	4名	絵の中のぼくの村-①	0名
3 月 5 日(木)	THE CODE/暗号-②	7名	花はどこへいった。-③	7名
3 月 6 日(金)	ぐるりのこと。-③	32名	猫の恩返し-③	0名
合計 (総鑑賞者数)		157 名		

(彦根会場・ビバシティホール)

月 日(曜日)	上映作品	鑑賞者	上映作品	鑑賞者
3 月 13 日(金)	花はどこへいった	25名	猫の恩返し	43名
	絵の中のぼくの村	15名	THE CODE/暗号	23名
3 月 14 日(土)	ぐるりのこと。	61名	THE CODE/暗号	120名
	猫の恩返し	118名	花はどこへいった	22名
3 月 15 日(日)	絵の中のぼくの村	97名	ぐるりのこと。	292名
合計 (総鑑賞者数)		816 名		

6. 関連イベント

映画祭開催にあたり、映画プロデューサー、監督、出演者をお招きしての舞台挨拶、ティーチイン(解説)を開催し、バリアフリー映画制作にあたってのエピソードなどをお話しいただいた。

■舞台挨拶

(大津会場)

2月21日(土)12:20 『THE CODE/暗号』 林海象監督、脚本家・徳永富彦氏

2月22日(日)13:15 『花はどこへいった』 坂田雅子監督

2月23日(月)13:15 『絵の中のぼくの村』 東陽一監督



林監督、徳永氏



坂田監督



東監督

(彦根会場)

3月14日(土)13:40 『THE CODE/暗号』 林海象監督、稲森いずみ氏、宍戸錠氏



(右から林監督、稲森氏、宍戸氏)



(左から)リリー氏、木村氏、橋口監督

■ティーチイン

(彦根会場)

3月14日(土)18:15 『猫の恩返し』 森田宏幸監督

3月15日(日)12:22 『絵の中のぼくの村』 東陽一監督&原作者・田島征三氏

3月15日(日)16:00 『ぐるりのこと。』 橋口亮輔監督、木村多江氏、リリー・フランキー氏



(右から)田島氏、東監督



森田監督

6. 上映作品のバリアフリー化

上映する映画については、＜バリアフリーによる新しい映画鑑賞の技術開発研究会＞で、副音声及び日本語字幕の加工についての研究・制作を実施し検討されてきた以下の5映画作品を上映した。

なお、今回の上映作品の選定の際には、一つの映画作品に対して著作権や制作権、配給権など様々な権利をクリアしていく必要があり、制作会社、監督などの理解と協力を得ることができた作品から副音声等の加工をしていくこととした。また、副音声および日本語字幕には制作者、監督自らも制作に携わり、シナリオを手がけて制作していった。

副音声では、無声映画時代に活躍した活弁の技術を取り入れて、より臨場感溢れる情景を言葉を通して伝えるかに挑戦した。

■バリアフリーによる新しい映画鑑賞の技術開発研究事業

本事業は、従来の画面説明に特化した字幕や副音声ナレーションではなく、晴眼者も一緒に鑑賞して楽しめる字幕や、活弁による副音声を開発する。従来は封切りから5年以上経った作品の上述の画面説明副音声映画は、製作されてきたが、タイムリーな映画を、社会の一員として楽しむことで、余暇のバリアフリーの確立を目指す。

上記の目的を達成するため、視覚・聴覚障害者が、エンタテインメントの新作劇映画やドキュメンタリー映画を一般観客と一緒に劇場で見ることができるよう、映画活弁を活かした副音声ならびに、エンタテインメント性の高い字幕を開発する。初年度として、上映作品はメインプログラムとして一般と同時公開作品と、他作品を厳選し副音声・字幕版を制作、一般劇場で公開・上映を試みる。映画のセレクション、公開・上映の手法、今後の展開についての展望、事業の効果測定等について本研究会を設置し、研究委員として、映画監督、映画評論家、映画製作関係者、障害当事者（視覚・聴覚）、学識経験者、行政関係者、福祉関係者等をもって構成する。

◎第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会での上映に向けてのコメント

誰もが、一緒に映画を楽しめるような真のバリアフリー映画を目指して、今年1年間研究会を重ねてきました。「障害のある人たちのために」という一方通行の発想ではなく、みんなが楽しめる視覚障害者用の副音声や、聴覚障害者用の字幕を開発したい、との思いから、この研究会には、バリアフリーの研究者、障害のある方々とともに、映画プロデューサーや映画監督にも加わってもらいました。将来は、映画製作の中に当然のこととしてバリアフリーを位置づけていくことが大切だと考えています。

この度のバリアフリー映画祭の成果が、障害者問題の先進県である滋賀県から全国へ情報発信できることも、地域之力、歴史之力と自負しております。

映画は万人に開かれた娯楽でなければならない、と思います。ぜひバリアフリー映画をお楽しみください。

■上映パターン(前項の研究事業において、以下の三種類を作成、上映スケジュール中の①、②、③の説明)

①視覚障害者用副音声付き

映画の画面の中だけを解説する従来の副音声ナレーションではなく、無声映画時代から培われてきた映画の活弁士の経験と技術を取り入れ、主人公や登場人物の感情の動きや風景の意味などを、活弁により感情の通った、生き生きとした表現の副音声付き。

②聴覚障害者用日本語字幕付き

画面の中にある音声を単に補うというものでなく、字幕文としての物語性を重視し、映画の監督やプロデューサーによる踏み込んだ字幕を試みる。

③日本語字幕及び副音声両方付き

障害の有無に関わらず、誰もが一緒に楽しめる新たな鑑賞の方法を体験する。

7. 上映作品

■ 劇映画『THE CODE／暗号』

監督: 林海象

出演: 尾上菊之助、稲森いずみ、宍戸錠、松方弘樹ほか

THE CODE プロジェクト／2008／2時間4分／35ミリ・カラー

- * 第21回東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門正式出品
- 第8回光州国際映画祭オープニング招待作品
- * 2009年初夏、日活配給にて全国ロードショー。



■ 劇映画『ぐるりのこと。』

監督: 橋口亮輔

出演: 木村多江、リリー・フランキーほか

『ぐるりのこと。』プロデューサーズ／2008／2時間20分／35ミリ・カラー

- * 文化庁助成映画
- * 第32回山路ふみ子映画賞
- 第33回報知映画賞・最優秀監督賞
- 第32回日本アカデミー賞・主演女優賞(木村多江)
- * 現在、全国ロングラン上映中。



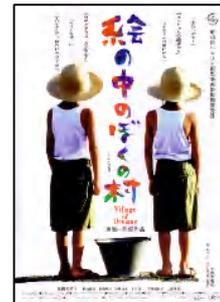
■ 劇映画『絵の中のぼくの村』

監督: 東陽一

出演: 松山慶吾、松山翔吾、原田美枝子、長塚京三ほか

シグロ／1996／1時間52分／35ミリ・カラー

- * 第46回ベルリン国際映画祭銀熊賞
- 第23回アントワープ国際映画祭グランプリ
- 第16回アミアン国際映画祭グランプリ ほか受賞多数。



■ アニメーション映画『猫の恩返し』

監督: 森田宏幸

声の出演: 池脇千鶴、袴田吉彦、丹波哲郎ほか

スタジオジブリ／2002／1時間15分／35ミリ・カラー

- * 第7回アニメーション神戸 作品賞・劇場部門
- 第6回文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門 優秀賞
- 第20回ゴールデングロス賞 日本映画部門 最優秀金賞



■ ドキュメンタリー映画『花はどこへいった』

監督: 坂田雅子

シグロ／2007／1時間11分／DV

- * アース・ビジョン第17回地球環境映画祭・環境映像部門入賞
- * 第26回国際環境映画祭・審査員特別賞受賞
- * 2008年岩波ホールにて公開後、現在も全国公開中。



8. 鑑賞者の声(アンケート集計及び会場での声より)

■視覚障害のある人たちの声

説明と映画のセリフが区別されて、聞き取りやすく、場面説明が瞬時に理解できた。
 状況を思い浮かべやすかった。
 音やセリフがまじってかえって聞こえにくかった。
 効果音等他の音との重なりが気になった。
 副音声及早口で聞き取りにくい。
 説明文が多いので、理解すると、その場の状況が終わっている。
 画面を言葉に置き換える副音声の作り方に感動です。
 制作者と鑑賞者とも慣れることが必要だと思った。
 普通の映画館で視覚障害の人が一緒に楽しめる副音声用の機械があるといいなあと思いました。
 途中で失明して以来、35年ぶりに映画館に来ることができました。

■滋賀県立盲学校中等部、高等部の生徒たちの声

森田監督がバリアフリー映画の副音声に力を入れて、一生懸命に制作してくださったおかげで映画をよりよく楽しむことが出来ました。
 副音声、すごく分かりやすく楽しかったです。これからいろいろな映画が副音声付きになるのをワクワクしながら待っています。
 ちょっとした場面で、いろんなことを工夫して時間をかけて(制作されて)すごいと思いました。餅田監督が小さなことでもすごくこだわっていて「さすが」と思いました。
 副音声が第一印象でおもしろいと思いました。単純な説明でなく、言葉に工夫がされていたので、すごく楽しめました。

■聴覚障害のある人たちの声

画面の下部分でなくても、画面の横(両端)にあってもいいかなと思った。
 補聴器を装着している聴覚障害の私にとってはとても気になった。
 副音声と映画のセリフがかぶっていて、余計にわからなかったところがありました。
 字幕にない副音声は聴覚障害者にとって「何を言っているんだろう…」って気になり、辛く感じました。
 内容は聞き取れないから分からないけど、「音」として気になった。
 色々な障害者が観る映画を統一させるのはとても難しいことだと感じました。

■その他、一般の人たちの声

音楽の解説が特に細やかに感じました。
 聞き取りにくい声も字幕でよく分かった。
 分かりやすく、上手く表現されていた。
 老いてきて見えにくい所もあり、声と字でよく理解できるのでよかったです。
 字が大きく、文章も短くまとめていた。
 女性のナレーション(副音声)の字幕がなかった。
 分かりにくいことでも、それを分かりやすく説明してくれたので、分かりやすかったです。
 感情が短く的確な表現で、状況説明が丁寧に上手く表されていたと思う。
 目を閉じると情景が浮かんできました。
 慣れていないため、スピードが速く感じました。
 説明的すぎて、つい頼り切って観てしまっているというか、映画の中を観察しなくなっていく……。
 画面より先に進むので、次のシーンが分かってしまう。
 副音声の主観が入っている。少しじゃまだった。
 目で見たことを説明されると分かりやすいが、思考力が落ちる気がする。
 普段から映画館でイヤホン(説明器)で観られるようになったらいいのと思った。
 きっと音の調節、音量にも気を遣って映画制作しているのだなあと思いました。

目と耳をフルに動かさなくてはならず、難しかった。
障害者の人にとっては忙しいなと思いました。
健常者にとっても分かりやすかったけど、障害者にとっては大変だと思った。
副音声の説明と自分で感じるのが違うので、面白かったです。
健常者にも良かったが、より芸術を求める人には「ない方がよい」と思われるかな。
副音声が邪魔になるかと思ったが、そうでもなかった。
どの映画もすばらしかったので、多くの方に観て欲しいと思います。
バリアフリー映画が世の中にもっと出ると良いと思います。
既に上映された映画に字幕、副音声をつけるのではなくて、バリアフリーを前提に映画を作られて、みんなで楽しめる映画にもっとできるといい。
このような映画がいつでも身近に観られる様になればよい。誰にも優しい分かりやすい映画だと思います。
副音声の入れ方とか字幕の入れ方とか、工夫すべき所は多いと思います。もちろんプラスの意味での工夫をお願いします。
制作、原作、監督の方が副音声、字幕に関わられた由、感激しました。
年を重ねれば全ての人が大なり小なり、目が見えにくくなったり、耳が聞こえなくなったりする。全ての人が映画を楽しめるようにこの取り組みはすばらしいと思います。
子どもや知的に障害のある人たちにとっても、分かりやすい説明で、映画の内容を楽しめるなと感じた。



『アートはボーダレス THE ファイナル』
開催報告

1. 開催状況

- ・会 期 平成21年3月15日(日) 16:45~17:15
- ・会 場 ビバシティホール (滋賀県彦根市竹ヶ鼻町43-1 ビバシティ彦根 2F)

2. 司会

- 三瓶京子(オフィスキーワード)
- 森野裕香里(滋賀県立盲学校専攻課理療科1年)

3. プログラム

- ①「本大会を振り返って」 * スライドショー(ナレーション; 森野裕香里)
- ②バリアフリーによる新しい映画鑑賞の技術開発研究事業について
大和田廣樹(バリアフリーによる新しい映画鑑賞の技術開発研究会 副会長)
- ③主催者挨拶 山田登志夫 (厚生労働省社会・援護局健康福祉保健部企画課自立支援振興室長)
- ④次回開催地紹介 鈴木章夫(静岡県厚生部部長代理)
- ⑤閉会にあたって 澤田史郎(滋賀県副知事)
- ⑥閉会宣言 久保貞雄 (第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会実行委員長)

4. 開催風景



大和田氏



山田室長



鈴木部長代理



澤田副知事



久保委員長



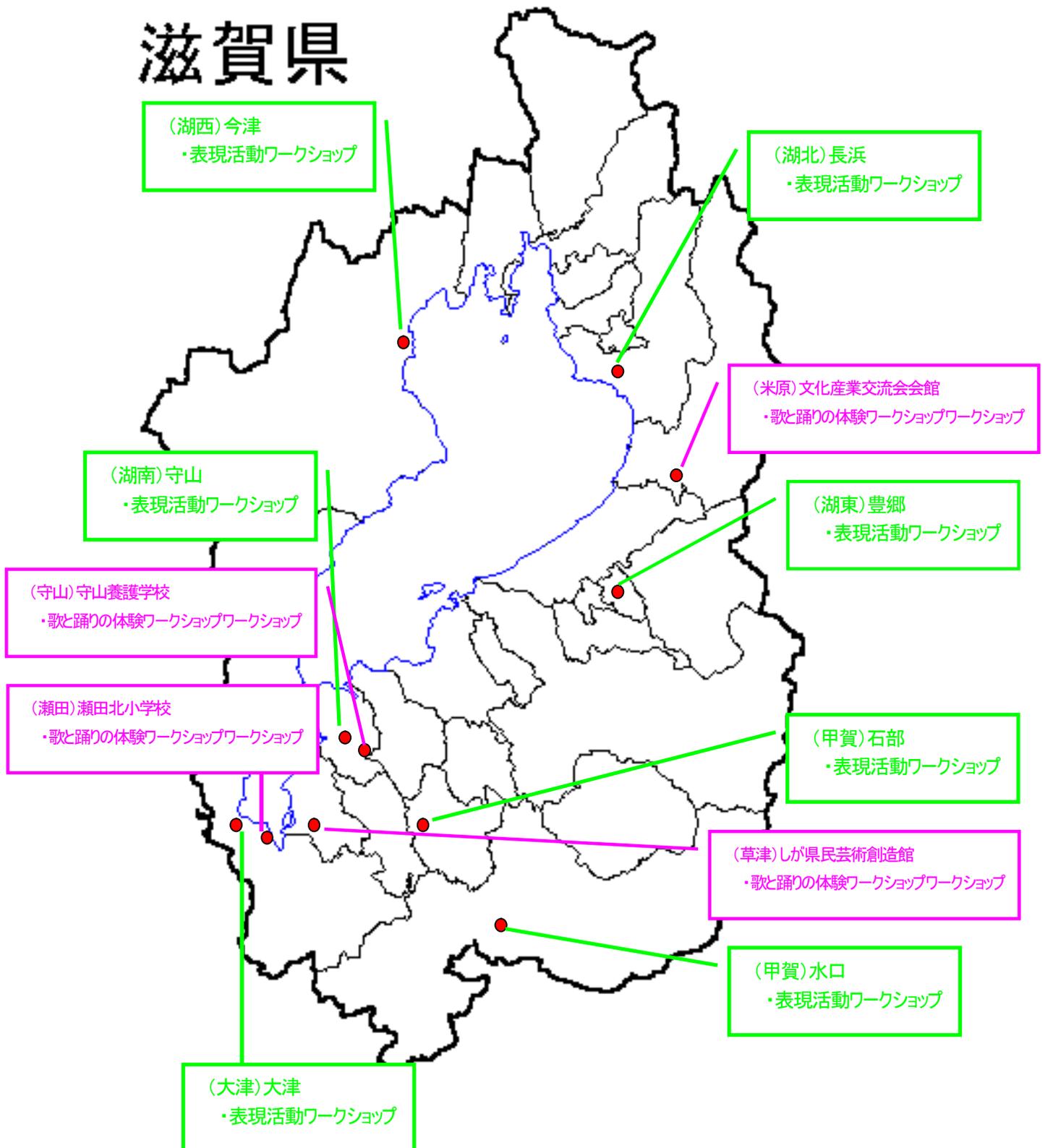
森野裕香里さん



表現活動ワークショップ
開催報告

1. 表現活動ワークショップ概要

「音楽が好き」「歌うことが好き」「身体を動かすことが楽しい」そんな誰もが感じる気持ちを大切に、自らを解放できる場作りを心がけた。また、音楽やダンスの専門家をナビゲーターとしてお招きして、人の内面にある情熱やエネルギーが放出される瞬間を参加者全員で共感し、お互いに刺激し合い、コラボレーションすることを楽しんだ。



①うたのワークショップ [湖西]

会場	清湖園（高島市今津町南新保）	
参加施設	ドリーム、大地、藤美寮、杉山寮、清湖園、藤の樹工房	
ナビゲーター	林 美紀 (声楽家)	滋賀県立石山高等学校音楽科、相愛大学音楽学部器楽学科にてピアノを専攻。大学で合唱部に所属。以来、「命輝けびわ湖第九コンサート」等多くの合唱コンサートやイベントに関わる。現在も合唱活動を続けながら、施設・デイサービスセンターで音楽支援活動を行う。石山高校・愛知高校・堅田看護専門学校音楽講師。
<p>2002年の「命輝けびわ湖第九コンサート」からこの地域で合唱のワークショップがスタートし、2004年から本格的に、地域の施設と連携を持って事業を展開している。メインとなるのは、合唱(うたうこと)で、流行曲や唱歌などさまざまな楽曲に取り組んでいる。ただ歌うだけではなく、体を使いながら歌うことに挑戦している。たとえば、手話を取り入れたり、小物楽器を使用してのリミッ的なプログラムも取り入れている。地域内の6施設から、40名を越える人たちが参加し、音楽を通して施設間の交流がなされている。</p>		

■開催状況(人) ※特別ワークショップで、10月20日は大地、11月11日は杉山寮のみの参加

1	4月24日(木)	20	10	9月4日(木)	37	19	12月4日(木)	14
2	5月1日(木)	19	11	9月18日(木)	40	20	12月18日(木)	30
3	5月15日(木)	35	12	10月2日(木)	34	21	1月8日(木)	36
4	6月5日(木)	17	13	10月16日(木)	11	22	2月5日(木)	42
5	6月19日(木)	31	14	10月20日(月)	※	23	2月19日(木)	47
6	7月3日(木)	44	15	10月23日(木)	40	24	3月5日(木)	46
7	7月17日(木)	50	16	11月6日(木)	50	25	3月19日(木)	48
8	7月31日(木)	32	17	11月11日(火)	※			
9	8月21日(木)	31	18	11月13日(木)	51		計	805



②打楽器演奏ワークショップ [近江学園]

会場	近江学園（湖南省東寺）	
参加施設	滋賀県立近江学園	
ナビゲーター	中路友恵 (打楽器奏者)	同志社女子大学学芸学部音楽学科打楽器専攻卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修課程修了。 現在、フリーの打楽器・マリンバ奏者として関西を中心に活動中。滋賀県立石山高等学校音楽科非常勤講師。パーカッションアンサンブル「シュレーゲル」メンバー。
<p>小学生低学年から高校生世代までのメンバー構成。西洋や東洋の楽曲をマリンバ、シロフォン、大太鼓、中太鼓などの打楽器をメインにアンサンブルを行ってきた。日々のプログラムは参加者の選んだ歌を1～2曲をまずは合唱することから始めている。その後、それぞれが太鼓などをもち、打楽器のワークショップを行っている。最初は好き勝手に叩いていても、指導者がリズムを奏でていくうちに、一人ひとりがそのリズムに続いていき、一つのハーモニーが生まれるようになる。</p>		

■開催状況(人)

1	5月29日(木)	18	10	10月8日(水)	19	19	2月25日(水)	19
2	6月11日(水)	18	11	10月15日(水)	18	20	3月11日(水)	14
3	6月25日(水)	18	12	10月23日(木)	19			
4	7月9日(水)	19	13	10月30日(木)	19			
5	7月22日(水)	18	14	11月5日(水)	18			
6	8月28日(木)	17	15	11月12日(水)	19			
7	9月10日(水)	18	16	12月10日(水)	17			
8	9月17日(水)	17	17	1月21日(水)	18			
9	10月1日(水)	19	18	2月4日(水)	18		計	360



③打楽器演奏ワークショップ [大津]

会 場	大津市立やまびこ総合支援センター（大津市馬場）	
参加施設	さくらはうす、ひまわりはうす、ステップ広場ガル	
ナビゲーター	清水美紀 (打楽器奏者)	滋賀県立石山高等学校音楽科を経て、同志社女子大学学芸学部音楽学科打楽器専攻卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修課程修了。現在、関西を中心にオーケストラ、室内楽、アンサンブル、ソロなどで活動している。パーカッションアンサンブル「シュレーゲル」メンバー。
<p>打楽器を使用するリズムワークが中心のワークショップ。太鼓やグロッケンなどの既製の楽器だけではなく、日常生活の身の回りにあるもの（フライパンや鍋やゴミ箱など）を楽器に見立て、3年前には模擬ジエゴク（竹を使った東南アジアの打楽器）、一昨年からは手作りカホンなども使用しながら、いくつかのリズムをそれぞれのグループと楽器に分かれて奏でながらハーモニー作りを楽しんでいる。</p> <p>なかなか楽器を使うことが上手にできない人に対しても工夫しながら、誰もが楽しめる空間を目指している。</p>		

■開催状況(人)

※ホールワークショップとなったために、参加費徴収の対象としない

1	5月10日(土)	8	10	9月18日(木)	7	19	2月7日(土)	11
2	5月19日(木)	7	11	10月4日(土)	※	20	2月19日(木)	6
3	6月14日(土)	5	12	10月23日(木)	6	21	3月14日(土)	4
4	6月26日(木)	13	13	11月1日(土)	7	22	3月26日(木)	12
5	7月5日(土)	9	14	11月13日(木)	11			
6	7月17日(木)	12	15	12月6日(土)	9			
7	8月2日(土)	7	16	12月18日(木)	12			
8	8月21日(木)	5	17	1月10日(土)	9			
9	9月6日(土)	14	18	1月22日(木)	13		計	187



④打楽器演奏ワークショップ [湖南]

会場	蛍の里（守山市洲本町井関）	
参加施設	にっこり作業所 蛍の里	
ナビゲーター	北村成美 (ダンサー・振付師)	通称、なにわのコレオグラファー・しげやん。6才よりバレエを始める。'00年ソロとなり、「生きる喜びと痛みを謳歌するたくましいダンス」をモットーに、バカおどり道を疾走中。ご家庭の居間で踊る「ダンスアットホーム」や1週間1人で踊り続ける「ダンスマラソン」を開催するなど、国内外で精力的な活動を展開。
<p>人の動きの一部分でもかまわないので、その動きを真似る「まねっこダンス」、自らの名前を体を使って自己紹介する「名前ダンス」などを、繰り返し実施してきた。自らを表現することについては、かなりスムーズにできるようになってきており、ペアダンスにも挑戦した。一定のルールは存在せず、「押す、引く、止まる、進む」の動きを取り入れ、相手の呼吸に合わせてたりしながら、それぞれにダンスを作り出している。そこには相手に合わせるだけでなく、当然ながら「自分自身」もきちんと存在している。</p>		

■開催状況(人)

1	4月12日(土)	20	10	8月30日(土)	22	19	1月31日(土)	22
2	4月26日(土)	21	11	9月6日(土)	20	20	2月14日(土)	21
3	5月17日(土)	15	12	9月27日(土)	22	21	2月28日(土)	21
4	5月31日(土)	21	13	10月4日(土)	24	22	3月14日(土)	23
5	6月7日(土)	20	14	10月18日(土)	23	23	4月28日(土)	20
6	6月28日(土)	22	15	11月1日(土)	21			
7	7月12日(土)	23	16	11月8日(土)	24			
8	7月26日(土)	22	17	12月13日(土)	22			
9	8月9日(土)	23	18	1月17日(土)	20		計	492



⑤打楽器演奏ワークショップ [湖東]

会 場	ステップアップ21 (犬上郡豊郷町八目)	
参加施設	彦愛犬地域障害者生活支援センターステップアップ21	
ナビゲーター	清水美紀 (打楽器奏者)	滋賀県立石山高等学校音楽科を経て、同志社女子大学学芸学部音楽学科打楽器専攻卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修課程修了。現在、関西を中心にオーケストラ、室内楽、アンサンブル、ソロなどで活動している。パーカッションアンサンブル「シュレーゲル」メンバー。
<p>当初は小太鼓、小物楽器などを使用したリズムワークを実施してきたが、竹と太鼓を使用して、ねぶた祭りの「ラッセラー」のリズムに合わせて演奏したり、既製の楽曲にリズムを合わせてサクソフォンなどの別の楽器とのアンサンブルなどにもチャレンジしている。</p> <p>より音楽を楽しむことを目的に、打楽器系の楽器だけでなく、小物楽器やボディパーカッションなども取り入れながら、時には「歌うこと」も取り入れ、誰もが音楽を楽しめる場づくりを行っている。</p>		

■開催状況(人)

1	4月5日(土)	18	10	8月30日(土)	14	19	1月10日(土)	15
2	4月19日(土)	15	11	9月13日(土)	16	20	1月24日(土)	12
3	5月3日(土)	19	12	9月27日(土)	18	21	2月14日(土)	14
4	5月10日(土)	20	13	10月11日(土)	12	22	2月28日(土)	18
5	6月14日(土)	21	14	10月18日(土)	16	23	3月14日(土)	18
6	6月28日(土)	19	15	11月1日(土)	15	24	3月21日(土)	15
7	7月19日(土)	16	16	11月8日(土)	17			
8	7月26日(土)	12	17	12月20日(土)	13			
9	8月23日(土)	18	18	12月27日(土)	13		計	384



⑥リズムワークショップ [甲賀]

会 場	オープンスペースレガートと貴生川事業所(甲賀市水口町虫生野中央)	
参加施設	バンバン	
ナビゲーター	林 美紀 (声楽家)	滋賀県立石山高等学校音楽科、相愛大学音楽学部器楽学科にてピアノを専攻。大学で合唱部に所属。以来、「命輝びわ湖第九コンサート」等多くの合唱コンサートやイベントに関わる。現在も合唱活動を続けながら、施設・デイサービスセンターで音楽支援活動を行う。石山高校・愛知高校・堅田看護専門学校音楽講師。
<p>歌を歌ったり、小物楽器やボンゴ・コンガなどの打楽器も使用して、誰もが耳にしたことがあるポップな曲から童謡、歌謡曲など、時に季節などに応じて選曲し、リズムワークを行っている。 参加者みんなが各々の範囲で楽しむ空間ができているため、一見バラバラな感じがするが、お互いの動きやリズムを感じつつ、それらに乗っかる形で、リズムが重なり合っていく不思議なワークショップである。 一人ひとりが自由に「音楽」というものを楽しめる若い年齢層のグループである。</p>		

■開催状況

1	4月16日(水)	4	10	9月17日(水)	5	19	1月14日(水)	6
2	4月23日(水)	4	11	9月24日(水)	5	20	1月21日(水)	5
3	5月7日(水)	4	12	10月1日(水)	5	21	2月4日(水)	4
4	5月21日(水)	4	13	10月4日(土)	2	22	2月25日(水)	6
5	6月4日(水)	3	14	10月15日(水)	5	23	3月4日(水)	6
6	7月2日(水)	5	15	10月29日(水)	6	24	3月25日(水)	6
7	7月30日(水)	5	16	10月5日(水)	6			
8	8月20日(水)	5	17	12月10日(水)	6			
9	8月27日(水)	5	18	12月17日(水)	6		計	118



⑦身体表現ワークショップ [湖北]

会 場	六荘公民館「六角館」(長浜市勝町)	
参加施設	あそしあ、ライフまいばら	
ナビゲーター	佐藤健太郎 (ダンサー)	1999年より京都で活動を開始する。2001年よりヤザキタケシ率いるアローダンスコミュニケーションに参加。国内はもとより海外公演多数。京都芸術センター主催「青頭巾」にて能楽氏の浦田保親と共演。ソロ作品「月星人」、「誰の空」がある。様々なジャンルの人達と関わりながら、自身の人間、身体への興味は日々増している。
<p>身体を動かしながら、自らの内面にあるモノを表現できればと取り組んでいる。ワークショップでは「自分の体のことを知る」ことから始め、無理に体を動かすのではなく、自分にとっての可能な範囲で、自由に体を動かしていく。基本としては、振り付けにあわせてだけのダンスするのではなく、人の動きを自分なりに体を動かして真似てみたり、細かなルールは存在せずに、フリーな形でワークショップを展開している。グループでのダンスから少人数、ペアのダンスなどバリエーションを増やしながらいっている。</p>		

■開催状況

1	5月15日(金)	10	10	9月25日(金)	10	19	2月20日(金)	11
2	5月29日(金)	11	11	10月3日(金)	10	20	2月27日(金)	11
3	6月13日(金)	12	12	10月24日(金)	4	21	3月13日(金)	11
4	6月27日(金)	12	13	10月31日(金)	6	22	3月27日(金)	11
5	7月11日(金)	11	14	11月14日(金)	9			
6	7月25日(金)	12	15	11月21日(金)	9			
7	8月8日(金)	12	16	12月19日(金)	11			
8	8月29日(金)	12	17	1月16日(金)	11			
9	9月12日(金)	11	18	1月23日(金)	11		計	228



2. サポータープロフィール

関口百合子 (大津)	大阪府立夕陽丘高校音楽科卒業。同志社女子大学学芸学部音楽学科演奏専攻打楽器卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修課程修了。現在、ソロ、アンサンブルでコンサート、幼稚園から学校公演まで演奏活動を精力的に行う。吹奏楽や障害者施設で指導にもあたる。
中村麻衣子 (近江学園)	同志社女子大学学芸学部音楽学科演奏専攻管弦打楽器コースを卒業。現在、同志社女子大学音楽学会《頌啓会》特別専修生。アンサンブルグループ Cotys[コテュス]、打楽器アンサンブル ドットcame、メンバー。様々なコンサートや学校関係、福祉施設等で演奏活動を行っている。
島田真理 (湖東)	滋賀県立石山高等学校音楽科卒業。同志社女子大学学芸学部音楽学科打楽器専攻卒業。 現在、パーカッションアンサンブル「シュレーゲル」のメンバー。 ピアノの指導も行い、幼児対象に「リズムあそび」の教室も開いている。
武内 彩 (湖南)	京都造形芸術大学卒。在学中の授業で初めてダンスに触れ学びだす。卒業後踊りたい気持ちが沸々と沸き上がり、色々なダンスワークショップに参加。07年ダンサーを育成する為の連続ワークショップ「さくらダンス道場」参加。同年12月「踊りに行け！！Vol.8」栗東公演に地元枠で出演。
野田まどか (湖北)	ミュージカルの舞台経験を経て、'96～'02 TMパフォーマンス・プロに所属。'01～'03年度 京都コンテンポラリーダンスラボ「Coaching Project」に参加。近年は、ソロ作品を発表する傍ら、国内外の振付家の作品を踊り、共同企画も行う。現在、「千日前青空ダンス倶楽部」のメンバー(芸名:ぼたん)。歌い手としての活動も積極的に行う。
竹村佳子 (甲賀)	滋賀県立石山高等学校音楽科卒業後、大阪音楽大学音楽学部器楽学科ピアノ専攻を経て、鳴門教育大学大学院教科領域教育専攻修了。近・現代から古典に至るピアノソロやアンサンブル、伴奏の分野で様々な演奏活動を重ねている。現在、大阪音楽大学演奏員、滋賀県立石山高等学校非常勤講師、日本ピアノ教育連盟会員。
林ゆかり (甲賀)	石山高校音楽科、同志社女子大学音楽学科卒業。東京芸術大学大学院修了。大学在学中、オーストリア・クラゲンフルトにてコフラー氏のマスタークラスに参加・スチューデントコンサートに出演。読売新人演奏会、YAMAHA 管楽器新人演奏会などに出演。現在ソロ、オーケストラ、吹奏楽、室内楽など多方面で活躍中。
神永強正 (甲賀)	滋賀県立石山高校音楽科を経て相愛大学音楽学部器楽学科ピアノ専攻卒業。第5回かやぶき音楽堂デュオコンクールB部門(2台ピアノ)・ファイナリスト。これまでピアノを、富増久美子、小堀由美子、岡原慎也の各氏に師事。相愛大学音楽部非常勤演奏助手を3年間務め、現在、滋賀県立愛知高校音楽コース非常勤講師。
西村和夫 (湖東)	滋賀県立守山北高等学校を経て、大阪音楽大学短期大学部卒業。サクソフォンを陣内亜紀子、井上麻子の両氏に師事。
高橋千尋 (湖東)	2006年大阪音楽大学へ入学。サクソフォンを前田昌宏氏に師事。 現在ミ・ベモル サクソフォンアンサンブルのメンバー。
本多千鈴 (湖東)	2005年四月、大阪音楽大学入学。現在4回生在中。サクソフォンを前田昌宏氏に師事。現在ミ・ベモルサクソフォンアンサンブルのメンバー。
西岡美恵子	同志社女子大学学芸学部音楽学科演奏専攻打楽器卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修課程修了。 パーカッションアンサンブル「シュレーゲル」のメンバー。
園 泉美	さくらダンス道場に参加。湖南での身体表現ワークショップにボランティアとして参加。

3. 巡回型ワークショップ「踊りと音楽の体験ワークショップ」の開催

ワークショップの活動を福祉分野の中のことだけとせず、芸術文化分野の取り組みとして、(財)滋賀県文化振興事業団との連携を図り、文化ホールや劇場を会場(共催)として実施した。自らの思いなどを、身体を使って、自らが奏でる音を通して伝えること、言語を使わずに物事を振動、身体を使って伝えること、また相手が伝えようとしていることを身体全体で感じることができるワークショップを開催した。また、しが文化芸術学習支援センター等学校関係との連携により、特別支援学級および学校に通う児童生徒を対象として、同様のワークショップを開催した。

①「踊りと音楽の体験ワークショップ 瀬田会場

日時	平成20年12月10日(木) 10:00~11:00
会場	大津市立瀬田北小学校 (大津市大將軍)
参加者	瀬田北小学校、瀬田南小学校、瀬田小学校、瀬田北中学校 各校の特別支援学級の生徒児童65名 教師15名 しが文化芸術学習支援センタースタッフ4名
ナビゲーター	(ダンス)北村成美 (打楽器演奏)中路友恵
サポーター	(ダンス)野田まどか (打楽器演奏)西岡美恵子



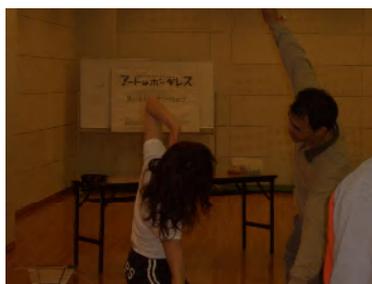
②「踊りと音楽の体験ワークショップ 守山会場

日時	平成20年12月10日(木) 14:00~15:00
会場	滋賀県立守山養護学校 (守山市守山)
参加者	滋賀県立守山養護学校の児童生徒 35名 教師15名 * 併設している滋賀県小児保健センターに入院している期間のみ通ってきている児童生徒達を対象としたワークショップ。 しが文化芸術学習支援センタースタッフ2名
ナビゲーター	(ダンス)北村成美 (打楽器演奏)中路友恵
サポーター	(打楽器演奏)西岡美恵子



③「踊りと音楽の体験ワークショップ 米原会場

日時	平成21年1月31日(土) 14:00～15:30
会場	滋賀県文化産業交流会館練習室1 (米原市)
参加者	湖北地域で暮らしている障害のある人たち 19名 職員4名 * 障害者支援施設「いぶきやま」、「ふくらの森」の利用者
ナビゲーター	(ダンス)北村成美 (打楽器演奏)中路友恵
サポーター	(ダンス)園 泉美
備考	(財)滋賀県文化振興事業団との連携により、滋賀県文化産業交流会館との共催という形で実施した。



④「踊りと音楽の体験ワークショップ 草津会場

日時	平成21年2月28日(土) 13:30～16:00
会場	しが県民芸術創造館リハーサル室 (草津市野路町)
参加者	県内で暮らしている障害のある人たち 8名 職員2名 * 障害者支援施設「信楽青年寮」の利用者
ナビゲーター	(ダンス)北村成美 (打楽器演奏)中路友恵
サポーター	(ダンス)野田まどか (打楽器演奏)中村麻衣子
備考	(財)滋賀県文化振興事業団との連携により、しが県民芸術創造館との共催という形で実施した。



アート・サポーター派遣事業
及び
『はじまりのアート展』
開催報告

1. アート・サポーター派遣事業

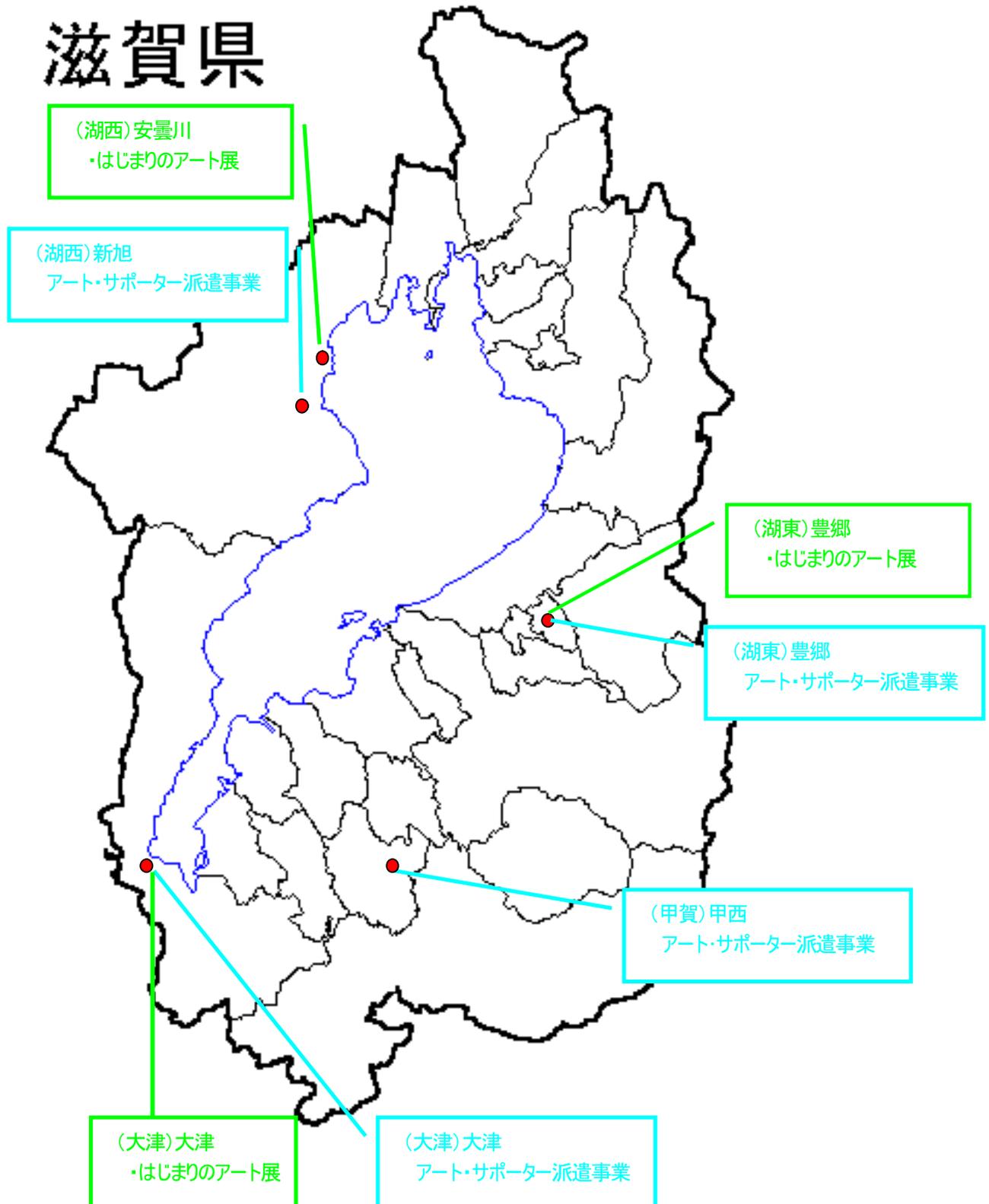
滋賀県内4ヶ所で開催するアトリエ活動に美術を学ぶ学生を中心にサポーターとして派遣し、障害のある人たちの造形活動を支援しました。

■登録アート・サポーター（合計26名） * 現役学生17名、・美術、芸術系大学OB9名

■アート・サポーター養成研修

各地域に派遣するアート・サポーターに対して、実地研修を行いました。

・講師 はたよこ氏(ポータル・アートミュージアムNO-MAアート・ディレクター・本大会実行委員)



①大津地域

- 実施主体 大津市立やまびこ総合支援センター
- 会場 大津市立やまびこ総合支援センター(大津市馬場)

■開催時期 毎月第1土曜日

■開催状況 (サポーター派遣人数) のべ14名 (参加者数) のべ50名 (名)

1	5月11日(日)	4	5	9月7日(日)	3	9	1月11日(日)	5
2	6月1日(日)	4	6	10月5日(日)	4	10	2月1日(日)	5
3	7月6日(日)	4	7	11月2日(日)	2	11	3月1日(日)	5
4	8月3日(日)	7	8	12月7日(日)	7			



②湖東地域

- 実施主体 彦愛犬地域障害者生活支援センターステップあつぷ21
- 会場 彦愛犬地域障害者生活支援センターステップあつぷ21(豊郷町八目)

■開催時期 毎月第1・3土曜日

■開催状況 (サポーター派遣人数) のべ25人 (参加者数) のべ334名 (人)

1	4月12日(土)	15	10	8月2日(土)	14	19	12月13日(土)	16
2	4月26日(土)	14	11	8月9日(土)	11	20	1月17日(土)	10
3	5月17日(土)	14	12	9月6日(土)	13	21	1月31日(土)	12
4	5月24日(土)	15	13	9月20日(土)	13	22	2月7日(土)	15
5	5月31日(日)	16	14	10月4日(土)	12	23	2月21日(土)	12
6	6月7日(土)	15	15	10月25日(土)	14	24	3月7日(土)	14
7	6月21日(土)	15	16	11月22日(土)	12	25	3月28日(土)	13
8	7月5日(土)	8	17	11月29日(土)	12			
9	7月12日(土)	13	18	12月6日(土)	16			



③湖西地域

- 実施主体 湖西地域障害者生活支援センター わになろう
- 会場 湖西地域障害者生活支援センター わになろう(高島市新旭町新庄)

■開催時期 毎月第1日曜日

■開催状況 (サポーター派遣人数) のべ26人 (参加者数) のべ131名 (人)

1	4月6日(日)	13	5	8月3日(日)	15	9	12月7日(日)	6
2	5月11日(日)	14	6	9月7日(日)	9	10	2月1日(日)	11
3	6月1日(日)	11	7	10月5日(日)	12	11	3月1日(日)	18
4	7月6日(日)	10	8	11月2日(日)	12			



④甲賀地域

- 実施主体 地域活動センターバンバン
- 会場 デイサービスセンターらく(湖南市西峰町)

■開催時期 第1、3土曜日

■開催状況 (サポーター派遣人数) のべ人 (参加者数) のべ名 (人)

1	4月12日(土)	15	9	8月2日(土)	14	17	12月6日(土)	16
2	4月26日(土)	14	10	8月9日(土)	11	18	12月13日(土)	16
3	5月17日(土)	14	11	9月6日(土)	13	19	1月17日(土)	10
4	5月24日(土)	15	12	9月20日(土)	13	20	1月31日(土)	12
5	6月7日(土)		13	10月4日(土)	12	21	2月7日(土)	15
6	6月21日(土)	15	14	10月25日(土)	14	22	2月21日(土)	12
7	7月5日(土)	15	15	11月22日(土)	12	23	3月7日(土)	14
8	7月12日(土)	8	16	11月29日(土)	12	24	3月28日(土)	13



2. はじまりのアート展

各地域で行われているアトリエ活動(アート・サポーター派遣事業)の中から生まれた作品の発表会を各地域において開催した。

①湖西地域

- 発表会名 「わになろう」ゆったりして やさしくて あたたかい
- 開催期間 平成20年12月13日(土)～12月21日(日)計9日間
- 開催会場 ギャラリー藤乃井(高島市安曇川町田中426)
- 鑑賞料 無料
- 鑑賞者数



②大津地域

- 発表会名 「いい時間・・・ポップ・ポップ」
- 開催期間 平成20年12月16日(火)～12月20日(土)計5日間
- 開催会場 大津市立生涯学習センター(大津市本丸町6-50)
- 鑑賞料 無料
- 鑑賞者数 193名



③湖東地域

- 発表会名 「あ・・・鼓動が聞こえる」
- 開催期間 平成21年2月28日(日)～3月7日(日)計8日間
- 開催会場 彦愛犬地域障害者生活支援センターステップアップ21 (豊郷町八目49)
- 鑑賞料 無料
- 鑑賞者数 220名



協賛事業 開催報告

本大会では、滋賀県でこれまで行われている取り組みを全国に紹介することを目的に、協賛事業として、以下の取り組みを開催し、絵画などの造形活動だけではなく、舞台上での音楽やダンスなどの障害のある人たちの表現について、幅広く紹介してきました。

1. ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 秋の特別企画展『飛行する記憶～記憶は創造を呼び起こす～』

- 内 容 2人の表現者を「記憶」というテーマのもとにコラボレーションさせ、その両者の作品のすきまに立ち上がって来る鑑賞者自身の記憶のイマジネーションをまさぐっていく。4組の作家たちの「記憶」作品のコラボレーションに出合っただき、その出会いから触発された鑑賞者自身の中にある記憶としての「何か」をたぐり寄せながら、古い屋敷での時間をゆっくりとお過ごしいただくという企画である。
- 開催期間 平成20年10月4日(土)～12月7日(日) 計56日間
- 開催会場 第1会場 ボーダレス・アートミュージアム NO-MA(旧野間邸・近江八幡市永原町上16)
第2会場 旧吉田邸(近江八幡市多賀町758)
- 出展作家 植田正治(写真家)、三橋精樹(鉛筆画)、木下晋(鉛筆画)、吉澤健(記憶ノート)
鈴木治(陶芸)、舛次崇(パステル画)、日比野克彦(絵画・立体)、佐久田祐一(貼り絵)
高橋和彦(ペン画)
- 観覧者数 2会場で合計 のべ 3,284名



2. ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 春の企画展『アール・ブリュット作品との対話～心の病と表現衝動～』

- 内 容 心の病にスポットを当て、国境、時代を超えた心の病がもたらす表現衝動の作品を2会場にわたり展示し、心の闇が照らした人間が持っている膨大な表現のエネルギーを作品の中に凝縮させた作品を2会場に展示する。ジャン・デュビュッフェの誉れ高い、アール・ブリュットの代表ともいえるアロイズとアジアの片隅に隠れていた5名の作家、それぞれが織り成す作品には、心の病がゆえに焙り出された表現衝動を2か所の会場に解き放つ。
ボーダレス・アートミュージアム NO-MA では「アロイズ 私の愛は蝶のように飛び去った・・・」と題し、アロイズの世界未発表作品など40点余りを展示した。旧吉田邸では、「目覚めぬ夢～日韓のアール・ブリュットたち～」と題し、5名の作家の作品を展示した。
- 開催期間 平成21年2月3日(火)～3月29日(日) 計49日間
- 開催会場 第1会場 ボーダレス・アートミュージアム NO-MA(旧野間邸・近江八幡市永原町上16)
第2会場 旧吉田邸(近江八幡市多賀町758)
- 出展作家 第1会場 アロイズ(スイス)
第2会場 土屋正彦、山崎健一、高橋重美、木本博俊、周 愛英(韓国)
- 観覧者数 2会場で合計 のべ 2,599名



3. 糸賀一雄記念賞第七回音楽祭～心の最深部にある心の真実を鼓舞する～

■内 容 今回の音楽祭も大ホール、中ホールを使用して開催した。その一つのプログラム(中ホール)では、これまでの音楽祭や表現活動ワークショップを通して、積み重ねてきた成果を素材に、舞台作品として完成させることを目指した。もう一つのプログラム(大ホール)では、ワークショップ参加者以外の方にも出演いただき、一般の参加者とコラボレーションすることや、合唱曲の選曲、編曲を工夫することにより、音楽的表現をさらに高めた舞台表現の場となることを目標に取り組んだ。

小ホールでは前回同様に、日ごろ県内各地で行われている表現活動ワークショップを一般の人たちを含めたくさんの人たちに体験してもらえ「踊りと音楽の体験ワークショップ」を開催した。

- 開催日時 平成 20 年 11 月 16 日(日) 10:00～17:10
「踊りと音楽の体験ワークショップ」(小ホール) 10:00～12:00
「現代版縄文の宴」(中ホール) 13:30～14:30
「Mind of Music」(大ホール) 15:00～17:10
- 開催場所 栗東芸術文化会館さくら大・中・小ホール (滋賀県栗東市糺2-1-28)
- 観賞者数 「現代版縄文の宴」「Mind of Music」(大、中ホール) 総数 453 名
- 参加者数 「踊りと音楽の体験ワークショップ」(小ホール) 総数 51 名
- 出演者数 総数 188 名 *ナビゲーター、インストラクター、サポーター、付添職員含めず



新聞記事

1. オープニングコンサート

全国障害者芸術・文化祭が24日に開幕

障害の有無にとらわれず芸術を通して交流を深める「全国障害者芸術・文化祭」が二十四日から滋賀県全域で催される。一年を通して映画祭や展示会などのイベントが予定されており、県は「障

湖国全域で1年通し

害のある人のエネルギーと豊かな表現力を感じてほしい」としている。厚生労働省と開催地の都道府県が毎年開いており、今回が八回目となる。九月から十一月にかけて、全国から募集した障害者のある人のエネルギーと豊かな表現力を感じてほしい」としている。一月には大津市内で「障害者のある人たちの表現活動に関するフォーラム」を、来年二月には大津市と彦根市で視覚・聴覚障害者を対象に映画を上映

多彩に多様な展示や映画祭

する。

五月二十四日は開会セレモニーを栗東芸術文化会館さきらで行い、世界的な和太鼓奏者の林英哲さんと、打楽器奏者の中谷満さんによるコンサートが開かれる。問い合わせは文化祭実行委員会 ☎0748(31)2481。

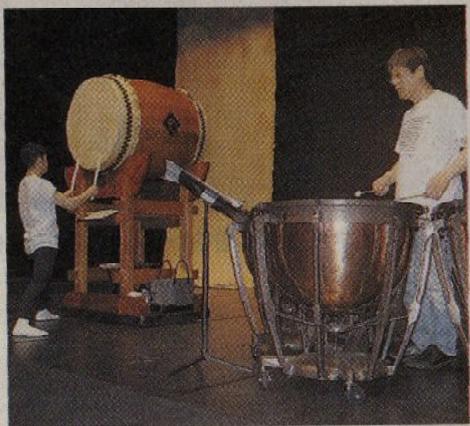
(小野俊介)

京 都 新 聞

5月21日(木)

あすから全国障害者芸術・文化祭 栗東でオープンコンサート

24日のオープンコンサートに向けて練習する中谷さん(右)と林さん(栗東市穂2丁目の栗東芸術文化会館さくら)



障害者が絵画や音楽、舞踊などの芸術活動を披露する「第8回全国障害者芸術・文化祭激賞大会」が今年度、県内で開かれる。来年2月までの期間中、公募作品展や映画祭、シンポジウムなどのイベントが予定される。24日、開会を飾るコンサートが栗東市の栗東芸術文化会館さくら大ホールで開かれる。

同大会は厚生労働省などの主催で県内での開催は初めて。11月に大津市の県立近代美術館で絵画や陶芸、写真などの公募作品展があるほか、11月から来年2月にかけて、

大津、彦根両市の映画館で「バリアフリー映画祭」も企画されている。
オープンコンサートには、和太鼓奏者の林英哲さんとティンパニ奏者の中谷満さ

ん、若手和大鼓奏者のグループ「英哲風雲の会」、パーカッションアンサンブル「シュレーゲル」が参加。今回の演奏のために特別に作曲された「和太鼓と打楽器アンサンブルのための鼓神Ⅱ」など6曲を披露する。ステージ上のスクリーンには、全国の障害者の絵画や陶芸などの作品が映像で映し出される。
午後5時半開場、同6時半開演。前売の当日とも一般3500円、小・中学生2千円、シルバー・障害者2500円。問い合わせは大会実行委員会事務局(0748・31・2481)へ。

障害者芸術・文化祭りハーサル

児童ら太鼓演奏楽しむ

栗東



リハーサルで和洋の打楽器演奏を披露する出演者たち
(栗東市・栗東芸術文化会館さくら)

「全国障害者芸術・文化祭滋賀大会」の開
幕前日の二十三日、栗
東市の栗東芸術文化会
館さくらで行われたオ
ープニングコンサート
のリハーサルに、滋賀

県内の障害のある児童
らが招かれ、演奏に間
き入った。

同祭は二十四日に幕
を開け、一年を通じて
県内全域で映画祭や展
示会などの催しを繰り
返す。

広げる。コンサートは、
大津市出身のティンパ
ニ―奏者中谷満さんや
太鼓奏者林英哲さんら
が共演し、障害者の美
術作品を映像で紹介す
る。リハーサルでは、

出演者が本番当日の曲
目の一部を披露。熱の
こもった演奏に子ども
たちは食い入るように
聞き入り、演奏が終わ
ると大きな拍手を
送っていた。コンサ
ートは午後六時半開演、
有料。
(上口祐也)

2. 公募展『独走羅列』

2008年(平成20年)11月20日(木曜日)

中日新聞



「独走」テーマに130作品

全国障害者芸術・文化祭

大津で公募展

第八回全国障害者芸術・文化祭の公募展「独走羅列」が大津市瀬田南大萱町の県立近代美術館で開かれている。二十四日まで。無料。

大会記念図録「アートはポータレス」に応募のあった五百二十人、五千点の中から十三人の百三十点を展示する。

障害者が理性と本能のまま、誰に促されるでもなく表現した「独走」的作品をテーマに掲げた。

日常的に接する病院

出品者の思いを形にした「独走」的な作が並ぶ—大津市の県立近代美術館で

や施設のスタッフを題材、自分の名前を紙の材にした線描画、自分両面に何度も書き付けの笑顔を思い描いた手た作品など、障害者ののひらサイズの粘土地、自由な表現が並ぶ。

会場内のモニターに全応募作品を映像で披露している。

(曾布川剛)

毎日新聞

2008年(平成20年)11月22日(土)

障害者全国公募展 独創的な13人130点

24日まで県立近代美術館ギャラリー

大津 全国各地の障害者の作品を展示する公募展「独走羅列」が大津市瀬田南大萱町の県立近代美術館ギャラリーで開かれている。24日まで。無料。

「アートはボーダレス」をテーマに県内で開催中の全国障害者芸術・文化祭の一環。近江八幡市の美術館「ボイダレス・アートミュージアムNOMA」の関係者が事務局となり、全国の障害者関係施設や日本精神科看護技術協会などの協力を得て、今年6～8月に公募。応募した522人、約5000点の中から選ばれた13人による約130点を展示している。



全国各地の障害者の作品が並ぶ「独走羅列」展

アートはボーダレス

は裸の女性を独特の形に表現し、力強さを感じさせる。甲賀市甲南町葛木の授産施設「やまなみ工房」で制作する鎌江一美さん(42)や山際正己さん(36)の粘土造形なども展示されている。

問い合わせは実行委(0748・31・2481)。「森田真潮」

2008年(平成20年)11月24日(月)

毎日新聞

「絵はもっと多様でいい」

田口ランディさん「独走羅列」展の魅力語る
ギャラリートーク



展示作の魅力や自身の創作活動とのつながりを話す田口ランディさん—大津市の県立近代美術館ギャラリーで

大津 大津市瀬田南大萱町の県立近代美術館ギャラリーで開催中の「独走羅列」展会場で23日、作家の田口ランディさんのギャラリートークが開かれた。同展は、

「アートはポータレスをテーマに県内で開催中の全国障害者芸術・文化祭の一環で、24日まで開催中の公募展。無料。ギャラリートークは、田口さんと、同展

企画者で「ポータレス・アートミュージアムNOMA」(近江八幡市)スタッフの井上多枝子さんとの対談で進んだ。田口さんは展示作の魅力について「『絵は

こうでないといけない』といった枠を崩し、もっと多様でいいと思わせてくれる」などと語った。さらに、自身の創作活動とのつながりに触れ、「私かなぜ表現するかと言われると、自分の体験した世界、感じた世界を誰かに分かってほしいから。人とつながろうとする力、生きていこうとする力は、たぶん、万国共通だと思う」などと話した。

【森田真潮】

3. バリアフリー映画祭

毎日新聞社

編集所 (東京都千代田区一ツ橋1-1-1)
〒100-8305 電話 03(32)2-0321

東京本社 (大塚市北区梅田3-4-5)
〒130-8221 電話 03(53)45-1551

西証本社 (東京都千代田区千代田1-5-11)
〒100-8951 電話 03(55)4-0131

中証本社 (名古屋市千代田区名駅4-7-1)
〒460-8681 電話 052(52)7-8000

北証本社 (札幌市中央区南一条西5-11)
〒050-8643 電話 011(22)4-4141

THE BRAILLE MAINICHI

点字毎日

定価(税込) 1年12,500円 半年6,250円
(1部あたり250円)

毎日新聞社点字毎日部

電話06-6346-8306(編集) / 8388(営業)
FAX 06-6346-8385 / 振替口座00920-0-450
〒530-8251 大阪市北区梅田3-4-5 毎日新聞大阪本社内

2009年 (平成21年)
1月22日 木曜日

第549号 (点字版4424号対応)

毎週木曜日発行
平成10年5月18日創刊(通算第1000号)4424号(創刊500)

毎日新聞社

滋賀でバリアフリー映画祭 大津彦根で上映

2、3月

滋賀県内で2月21日 ユナイテッドシネマ大津(大津市、2月21日)から3月15日まで、バリアフリー映画祭が開かれる。映画祭は、「アートのボーターレス」を3月13日から15日までテーマに08年5月から1年間開催されている「第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会」の一環。副音声ガイドをアロの活弁士が担当するといった新しい試みも行われる。

上映作品は、09年5月公開予定の「THE CODE/暗号」(林海象監督)をはじめ、「ぐるりのこと。」(橋口亮輔監督)▽「絵の中のほくの村」(東陽一監督)など5作品。

各教科は13年度からのスケジュールに従うが、総則部分と自立活動は10年度からの実施。理療や保健療などの専門教科は10年度から先行して実施することもできるとしている。

改定案は同省のホームページで公開中(PDFファイル)。意見は、電子メールや郵送、ファクスで。アドレスは、http://www.next.go.jp/a_menu/photo/new-cs/081223.htm

74

享月 日 業斤 聞

2009年(平成21年)2月1日 日曜日

映画だってバリアフリー

大津・彦根で上映会

視覚、聴覚障害者向けの「バリアフリー映画祭」が、大津市と彦根市で開かれる。「第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会」の一環で、厚生労働省と県の主催。福祉や芸術関係者による実行委員会が運営する。

上映作品は「THE COD E/暗号」(08年、林海象監督)、「くるりのこと。」(08年、橋口亮輔監督)、「絵の中のぼくの村」(96年、東陽一監督)、アニメ映画「猫の恩返し」(02年、森田宏幸監督)、ドキュメンタリー映画「花ほどこへいった」(07年、坂田雅子監督)の邦画5作品。

視覚・聴覚障害者向け

映画のせりふや情景描写を副音声で吹き込んだ視覚障害者向けの上映、日本語字幕を付けた聴覚障害者向けの上映、副音声も字幕も付いた上映の3パターンがあり、自分に合ったサービースを選べる。

大津は2月21日、3月6日、大津市打出浜のユナイテッド・シネマ大津で、彦根は3月13、15日、彦根市竹ヶ鼻町のビバシティホールで、両会場ともに、監督らによる舞台あいさつが予定されており、手話ができる人による案内もある。舞台あいさつの日程や上映時間などの問い合わせは、県社会福祉事業団企画事業部内の実行委員会(07-48-31-2481)へ。

H21. 2. 4 (水)

京 都 府 楽 天 館

視覚や聴覚に障害のある人たちも日本語字幕と副音声で邦画を楽しめる「バリアフリー映画祭」が、二月下旬から滋賀県内一カ所で開催される。邦画の劇場上映で字幕と副音声を付ける試みは珍しいといいい、全国未公開や人気作を含む五作品を上映する。県内で開催する全国障害者芸術・文化祭滋賀大会（奥など主催）の締めくくりに、イベントとして、自らも障害のある字読者や障害者施設、映画制作会社の代表らでつくる研究会が企画した。

副音声で、脚本や制作者の意図を反映するよう心がけたという。例えば上映作品の「つぐみ」のこと。「では、人を探す場面が「ほつんと立ちついてる」、判決公判を前にしたシーンでは「広々と、天井の高い法廷。なぞと、せりかたなくても登場人物の心情や映像効果を推し量れるナレーションを入れる」。

障害者配慮 邦画に字幕と副音声

障害者自立支援課は、臨場感あふれる映画館で上映を楽しむための声が聴覚障害者からあるといい、「少しのサポートさえあれば、障害者も一緒に映画を見られる環境はつくられることを示したい」と話している。上映作品は「くるり」のこと。「のほか、今年公開予定の「HIDE CODE」や「暗号」と「ジブリアニメ作品の「猫の恩返し」「絵の中のはくの村」「花はどこへいった」。大津市のユナイテッドシネマ大津で「21日～3月6日」、彦根市のピバシティホールで「2月13日～15日、1日～2回」上映する。

期間中、移動支援や会場への誘導を担うボランティアも募っている。問い合わせは県社会福祉事業局0748(31)2461。

今月下旬バリアフリー映画祭

毎 日 新 聞

2009年(平成21年)2月6日(金)

バリアフリー映画祭

今年予定される劇場公開に先駆けて「バリアフリー映画祭」で上映される「THE CODE/暗号」 三県社会福祉事業団提供

視覚・聴覚障害の人にも

感動を



21日から大津と彦根で

セリフだけでなく字幕描写を丁寧に説明する朗音由や日本語字幕を用い、視覚や聴覚に障害のある人にも映画を楽しんでもらう「バリアフリー映画祭」が2、3月、大津市と彦根市で開催される。実行委は会場への誘導などを支援するボランティアを募集している。

昨年からは県内で行われている第8回全国障害者芸術・文化祭総覧大会の一環、大津会場はユニイアッドシネマ大津(大津市打出浜の大津パルコ)で2月21日〜3月6日に1日2回上映、彦根会場はビシテイホール(彦根市竹ケ島町のビシテイ彦根)で3月13日、同15日に1日2〜4回上映。

上映作品は▽「THE CODE/暗号」▽「Vividのこころ」▽「絵の中のほくろの村」▽「猫の恩返し」▽「花はとてへじった」――の5作品。最終日の3月15日午後4時からは、彦根会場で「ぐるりのよひ」の鑑賞や出演者が参加するイベントがある。

ボランティアは初心者や1日だけの参加も可。大津と彦根で各約20人募集。申し込み・問い合わせは実行委事務局の県社会福祉事業団企画事業部(0748・31・2481)。

【服部正法】

2009年(平成21年)3月11日(水曜日)

滋賀彦根

障がい者も楽しめる映画

ビバで上映会、舞台あいさつも

視覚、聴覚の障がい者でも楽しめる「バリアフリー映画」の上映会が13日から15日まで、ビバシティ2階のビバシティホールで開かれる。

「障害のある人たちにも映画を楽しんでもらおう」と有志らが、視覚障がい者用の副音声と聴覚障がい者用の字幕を取り入れた上映会を企画した。作品は「THE E. CODE/暗号」、「ぐるりのこと」、「絵の中のぼくの村」、アニメ「猫の恩返し」、ドキュメンタリー「花はどこへいった」の5作。14、15日には出演者らの舞台あいさつも。

入場料は、障がい者・大学生以下・60歳以上が500円、それ以外が1000円。障がい者の介助者(1人まで)も500円。前売りあり。上映時間など問い合わせは事務局 ☎0748(31)2481へ。

産経新聞 夕刊 平成21年3月14日(土)

映画 待望のバリアフリー版

視覚や聴覚に障害のある人たちに映画を楽しんでもらおうと、字幕や副音声をつけた本格的な「バリアフリー映画」が完成し、15日まで滋賀県彦根市で上映されるなど、全国巡回上映が始まった。障害者から待ち望まねながら、表現への配慮や著作権の問題で困難とされてきたが、福祉や映画業界の関係者でつくる「バリアフリーによる新しい映画鑑賞の技術開発研究会」(事務局・鹿児島市)が実現に力を注いだ。

彦根で上映、全国へ

バリアフリー版は、5月公開の新作ミステリー「THE CODE/暗号」やスタジオリの「猫の恩返し」など5作品。障害者と映画関係者らが検討し、登場人物のせりふの合間に、活弁士の実況音声を入れ、映像に表れない音が入るシーンなども字幕で説明を入れた。

「猫の恩返し」など、字幕や副音声 監督ら協力

バリアフリー化はこれまで主に福祉団体がボランティアで取り組んできたが、作品表現に気を使って余計な演出を抑えるため、本来の意図を伝えきれないケースがあった。また著作権はテレビ局や広告代理店などが共同で所有することが多く、作品に手を加える場合に各社の合意が壁になった。

表現の問題は、研究会発起人の一人で映画会社社長の山上徹二郎さんが、監督らに呼びかけ、字幕や副音声の制作に協力してもらうことでクリア。権利の問題は山上さんの会社から3作品、趣旨に賛同したスタジオリなどから2作品の使用許可を取り付けた。

山上さんは「次は企画段階からバリアフリーを意識した新作映画の制作にも挑戦したい」と話している。

今後は大阪や東京などでも上映される。

2009. 3. 15 中日新聞

彦根・バリアフリー映画祭 出演俳優が来場

きょう閉幕



「アートはポーターレス」を合言葉に、県内で開催中の「第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会」(厚生労働省、県主催、中日新聞社後援)のフィナーレを飾るバリアフリー映画祭が十四日、彦根市のヒバシティ彦根内「ヒバシティホール」で開かれ、作品に出演の俳優陣らが舞台あいさつに立った。

障害の有無にかかわらず映画を楽しむことのできる環境整備を進めていくこと、全国に先駆けて行われた。この日は、ことし五月に全国公開される探偵アクション映画「THE CODE」暗号」の林海象監督「写真」と出演俳優の穴真「と出演俳優の穴戸錠さん」同、稲森

いずみさん「同」が来場。林監督は「本格アクションを織り交ぜた面白い娯楽映画に仕上がりました」とあいさつした。

今映画祭では、「THE CODE」を含め、ドキュメンタリーやアニメーションなど五作品を上映。すべての作品に、詳しい情景描写を紹介する音声と字幕が付けられている。最終日の十五日午前十時半からは、一九九六年度のベルリン国際映画祭銀熊賞受賞作品

の「絵の中のぼくの村」、午後一時四十分からは主演の木村多江さんが今年の日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を獲得した作品「ゆるゆると」が

上映される(上映後出演者らの舞台あいさつあり)。

チケットは一般五百円で、幼児、小中高大生、障害者、六十歳以上は三百円。(大橋聡美)